大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正三年四月一日發行第二卷第七號（大正三年三月二十日印刷納本）

近代思想

四月號

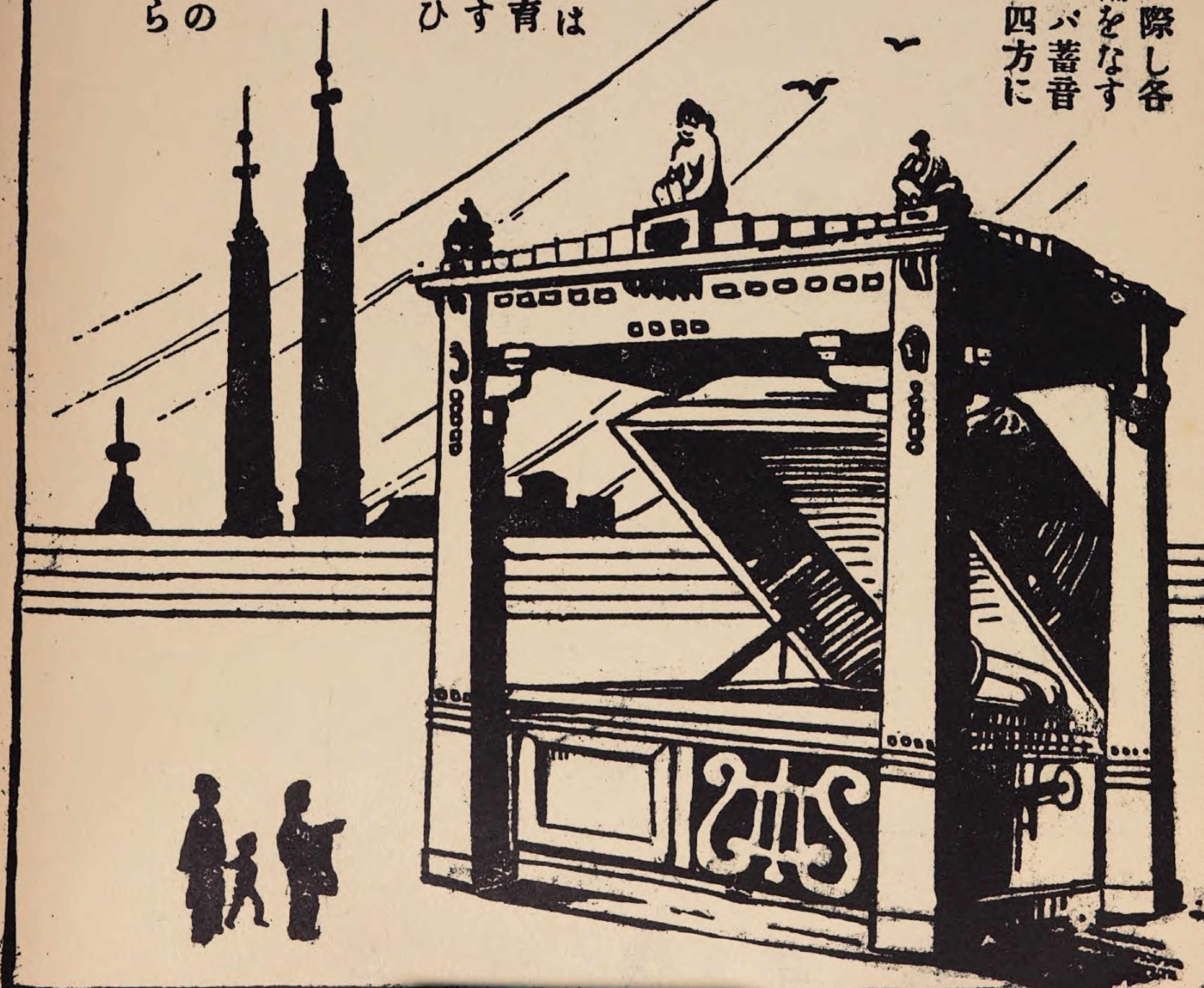
近代思想社

東京府下大久保百人町三五二

大正博覧會と

ニッポノホン特別館

弊社は今回の大正博覧會に際し各種蓄音器の出陳販賣の設備をなすと同時に弊社專賣の無ラッパ蓄音器ニッポノラを郭大し五間四方にして高二十八尺なる大模型を作り之を特別館として上野第一會場内美術館前に建設せり此特別館はニッポノラの實物同様の設計をなし電力を以て之を運轉せしむるを以て蓄音器の構造機械の回轉は何人にも一目瞭然たれば教育上の好參考資料たるを自信す殊に發音は大聲發音機を用ひて微妙の樂を奏し時に或は都下に於ける有名なる聲樂家の出演をも催すを以て蓋し同會場に於ける珍趣向たるべし希くは江湖の人士多數御來觀の榮を與へられん事を



生活と藝術四月號には下の諸氏が執筆します。まだ内容も題名も解りませんが本誌一流の最も自由にして勇氣ある記事を掲載します。

楠山正雄（評論）	仲田勝之助（評論）
伊庭孝（評論）	西村陽吉（詩）
大杉榮（評論）	安成貞雄（評論）
土岐哀果（詩）	園三千夫（對話）
加藤一夫（小說）	青年諸氏（歌）
堺利彦（評論）	

■定價一冊十八錢
■郵税一錢

發行所 東京市日本橋區檜物町九 振替東京五六一一四 東雲堂書店

泰西の文豪思想家の女と戀と結婚と「」に關する警句集也

内田魯庵氏序　宮田脩氏序　安成貞雄氏跋

徳田秋聲氏序　大杉榮氏序　安成二郎氏譯

警句集 女と悪魔

(新刊)

特製最美本　定價四拾錢　郵送料四錢

人生のあらゆる意義と不可思議とを結晶せしめたるものあり、之を「女」と云ふ。人間のあらゆる思想と考察とを結晶せしめたる者あり、之を「警句」と云ふ。本書は泰西の文豪、思想家の遺せる「女」の「警句」を蒐めたるものにして、一卷數百餘章、皆一語よく人生の最深最奥に穿到して其眞意義を語るものに非ざるはなし　再讀四讀して必ずや味到するところ測るべからざる者あらん。最も少量の讀書によりて**最も多大の興味と暗示を得ん**とする人々に之を薦む。

東京市牛込區矢來町中ノ丸五十八號　新潮社　電話番町二二二三番　振替東京一七四二番

東京帝國大學宗教講座の參考書たる一大名著譯

獨逸ゲッチンゲン大學教授 ブッセット氏著 文學士 大川周明先生譯

再版

宗教の本質

宗教の本義本質は最も明快に論斷せらる

譯者曰く 紛糾を極むる宗教生活の事實を斯程まで手際よく取扱ひ得た學者は尠からう。ブッセット教授の此著は、最も簡潔なる敍述の間に、宗教進化の跡を忠實に辿りつゝ、凡ゆる重要な宗教現象を殆ど洩なく捃摭して、宗教に對する極めて明瞭な概念を與へる點に於て、總て此類の著作の間に高き地位を占め得る者である、吾等は教授が其所有する所の豐富なる材料を、吾等が要求し得る限りの公平と同情とを以て取扱はれたる學者的態度に對して、心の底から敬意を表せざるを得ぬ云々。

宗教名畫二十葉入

三上知治畫伯装釘
菊判三百六十餘頁
總布綴箱入美装釘
定價 金壹圓拾錢
小包料 金十二錢

文學博士 桑木嚴翼先生著
●現代の價値（再版） 金一圓三十錢 小包料十二錢

文學博士 桑木嚴翼先生著
●時代と哲學（五版） 金壹圓二十錢 小包料十二錢

文學博士 松本文三郎先生著
●宗教と學術（再版） 金壹圓三十錢 小包料十二錢

文學博士 加藤玄智先生著
●宗教講話（三版） 金九拾錢 小包料八錢

ルッソー原著 三浦關造先生譯
●人生教育 エミール（六版） 金壹圓六十錢 小包料十二錢

トルストイ原著 小田賴造先生譯
●人道主義（三版） 金九拾五錢 小包料十二錢

法學博士 浮田和民先生著
●倫理的帝國主義 金貳圓五十錢 小包料十六錢

三博士二大家合著
●最新思潮講話 金壹圓 小包料八錢

東京京橋南鍋町
隆文館
（振替東京八五三）



第二巻第七號

四月

いつしかまた、四月となりぬ、往還り、電車の窓に、花見る身の上

×

夜起きて、ミルクの罎を温めつ、ふと驚きぬ、父の心を

×

懐に、いさゝかなれど、金があり、安寧秩序を、今日は亂さじ

×

ヒロシはありきそめ、シゲリは笑ひ初めたり、見に來、妹よ

×

子どもらよ、疲れし父を、一夜は、騒がす勿れ、悲しき眠りを

×

父となりし、免れ得ざる過ちと、夫となりし、愚 の過ち

×

花咲かば、一夜、總ての苦を忘れて、本を讀まんと、思へば、
涙落つ

×

泣き止まぬ子どもの爲めに、母も泣く、目ざめし父の、貧しき
心よ

×

疲れて歸り、家近くなれば、ふと、子らの、可愛き顔の、目に
浮かび來る

×

四月なりき、花散り方の東京を、初めて踏みし、二十の若き日

——(安成二郎)——

主觀的歴史論

——ピヨトル・ラフロフ——

大杉榮

一

ピヨトル・ラフロフを紹介する事は僕に取つて二重の興味がある。即ち其の一は、彼の客觀中毒の社會主義者の間に此の主觀的歴史論の力説者を見出し得た事と、其の二は、從來の紳士閥學者は勿論、多くの社會主義學者までが、殆んど默殺した哲學者としての此の個人主義的社會主義者を、地下から呼び起して來た事である。

僕は先づ、其の本國の露西亞の外には餘り知られてゐない彼れの生涯を語りたい。

ピヨトル・ラフロヰツチ・ラフロフは、一八二三年六月十四日、プスコフ州の一邑メレホーヴォに生れた。そして一八三七年まで兩親の許に在つて、其の年ペテルスブルグの砲兵學校に入り、一八四二年士官に任命された。

一八四四年から一八四六年まで、最初此の學校に、後砲兵大學に初等數學を教授し、更に其後高等數學の教授となつた。

ラフロフの文學的活動は一八五六年に始つた。即ち『讀書文庫』に公けにした其のヘーゲル哲學に關する大論文は、始めてラフロフを世間に認めしめたものであつた。又一八六〇年、ヘルチエンとプルードンとにデヂケートした其の『個人性論』は非常に歡迎されたものであつた。そして此の論文は彼れの生涯の哲學と活動との基調となり、且つナイヒリズムの倫理的基礎になつたのである。

一八六一年、ラフロフはクライエフスキーの『露國百科辭典』の哲學部を主任し、後其の第二卷の編輯の時から、推されて其の編輯長となつた。ラフロフは此の辭典の中に哲學、歴史、特に宗教史に關する多くの論文を發表した。

間もなく此の辭典は其筋から發行を禁止された。そして此の時から露國政府はラフロフの中に其の敵を見出したのであつた。『四五人の首領をぶちこめば——(ラフロフやチエルニシエフスキー等を指したのだ)——革命は卵の中につぶして了へるんだ』これはチエルニシエフスキーが逮捕された數ケ月前に、オルデンブルグ公爵が言つた言葉であつた。

やがて其の機會は來た。一八六六年四月四日カラコソフの暗殺事件があつた。恐怖時代が始まつた。ラフロフは見逃さるべく餘りに貴重な獲物であつたのである。即ち彼れは四月二十五日に逮捕されて、九ケ月間の要塞拘禁に處せられ、更に警察官の監視の下に、北方の僻村に追放を命ぜられた。即ち翌年二月十五日、ラフロフはフォロクダ州トトマに追はれ、更に其の翌年カニドコフにやられた。そして其處に、二名の憲兵の監視の下に、只だ一人幽はれの生活を送つた。

しかし其の間に彼れの智識的活動は益々盛んになつた。即ち一八六八—七九年、ミルトフの僞名の下に、其の『歴史論』『文明と野蠻部落』及び『道德論』等を露都の諸雜誌に送つた。殊に此等の歴史論は當代の露國青年間に非常に影響のあつた者で、ナイヒリストの革命的福音書とまで呼ばれた。

三ケ年の追放の後、一八七〇年二月十五日、ラフロフは其の同志ヘルマン・ロパチ

ンの助けによつて、カドニコフを連れて、亡命の道に就いた。
　同年三月十三日、巴里に着いて、直ちに同志ヴルレンと交り、其の紹介によつて萬國勞働者同盟に入つた。
　斯くしてラフロフは普佛戰爭や及びコンムユン一揆の間巴里に滯在した。そしてもと參謀大佐たる彼れは、コンムユン政府を助けて、初等敎育の組織に力を盡した。やがてラフロフはコンムユン一揆に補助を乞ふべくブリユセルに走り、更に倫敦に赴いた。
　倫敦で彼れはマークスやエンゲルスに會つた。そして爾來此の二人とは甚だ親密な交りを結び、爲めに科學的社會主義への其の思想の進化を助けられた。
　一八七一年、再び巴里に歸り、七二年ブロカに招かれて、人類學會々員となり、其の創刊する雜誌の編輯局に入つた。
　同年更に故國同志の提言を受けて、一社會主義雜誌の創刊と經營とに當り、翌年、Vpered（前進）を發刊した。
　此の時代以後のラフロフの生涯は、全く其の偉大なる智識的活動と革命的活動との歷史であつて、一般の思想界、殊に社會主義的思想、及び其の露西亞に於ける實現のために其の力を傾倒したのであつた。
　一九〇〇年二月六日、ピヨトル、ラフロフは巴里で死んだ。そして其の遺骸はモンパルナスの墓地に埋められた。

二

　ピヨトル・ラフロフは露西亞に於ける科學的哲學の最初の代表者である。
　由來露西亞は、所謂哲學の、即ち體系的哲學の機會がなかつた國である。此のラフロフを除けば、此の種の一人の大哲學者をも、又多少歷史的價値のある此の種の一個の哲學的概念をも產まなかつた國である。ヘーゲルや、シエリンクや、フイヒテや、カントや、又殊にコントや、ミルや、スペンサーなどの熱心なる學徒はあつた。しかし其等の學徒は皆な只だのディシプルに過ぎなかつた。一個の體系的哲學思想の一人のメートルもなかつた。
　これは一般的概念に對する特殊の才能が此の國民に缺けてゐたわけからではあるまい。プシキンの如き詩人、ツルゲネフ、トルストイの如き文豪、ビエリンスキー、チエルニシエフスキー、ミハイロフスキーの如き批評家メンデレエフ、メチニコフの如き科學者を產んだ此の國民が、綜合的觀念の才能に缺けてゐるとは思はれない。又此の現象は露西亞國民の固有なる現實的實際的精神によつても說明する事は出來まい。此の國にも神秘主義はあるのである。又此の同じ現實的實際的精神は等しく北方の大國民たる英吉利人をして、ベーコンや、ホッブスや、ミルや、スペンサーを產ましめる事を礙げなかつたのである。
　されば露西亞國民の哲學的貧弱の眞の原因は、西歐諸國の有らゆる大哲學體系が或は其の形而上的及び先天的なる方法により、或はそれに代つた氣隨氣儘なる構造によつて、甚だ危地に陷つてゐた時に、此の大なる將來を有する國民が始めて其の科學的經歷に就いたと云ふ事實に在るのだ。そして露西亞の最も聰明なる學者は、哲學と形而上學とを同一視して、相率ゐて此の哲學から遠ざかつたのであつた。
　近代哲學は、宗教的獨斷說を破壞し批評的精神を開發せしめる事に於て、全く科學的精神の發達に力を藉りたので、もはや科學から獨立した存在を營む事が出來なくな

つた。そして遂に科學の上に、科學のそとに、科學の前に、哲學はあり得ない。哲學は科學であらねばならぬ、少なくとも科學的與件に基かねばならぬ、科學の後に、科學の助けによつて立てられねばならぬ、之れと反對の場合には、哲學は存在の權利がない、と云ふ程までになつた。そして十九世紀の終りに於ける所謂正確科學の目ざましき發達は、カントの批評哲學と結びついて、オーギュスト、コントの實證哲學に到達した。即ち絶對的本體の哲學、實體論的哲學が、諸科學の哲學、歴史の哲學に代へられた。そしてコントは此の最後の哲學を社會動學と名づけた。

　ピヨトル、ラフロフは此の新哲學運動を最もよく理解し、又其の運動に全身をうち込んだ露西亞に於ける最初の人であつた。此の新哲學運動に就いては、更に最近の哲學運動に觸れた僕等に取つては別に議論がある。又ラフロフも有らゆる點に於てコントと一致したのではない。コントの哲學が猶眞の哲學に缺いてゐる事を發見して、更にそれを改造した一體系を立てたのであつた。けれども僕は今コントの實證哲學、及びそれに對するラフロフの態度、及びラフロフの哲學體系を説く事を省いて、彼れが智識的全精力を注いだ歴史哲學、社會學、及び社會倫理學に就いての其の主觀論を殊に紹介したいと思ふ。

三

　ラフロフの著作の中心問題は、人格の問題、個人の問題であつた。そして當代の社會科學に於て彼れが優秀なる地位を占めなければならぬのは、此の個人の問題即ち自己の道徳的及び歴史的價値を意識した個人の問題の研究であつたのである。彼れは先づ社會學に於ける純粹の客觀的方法に反對して、彼れ自ら『主觀的方法』と稱へたものを以て之れに對立せしめた。

　客觀的方法の最も有名なる代表者はハーバート・スペンサーであつた。スペンサーは其の進歩の法則を立てるのに、個人の利害とか、幸福とかを度外視して、社會的及び歴史的行程は其の客觀的方面によつてのみ個人と交渉するものとした。佛獨英の多くの哲學者は、所謂第一原則の著者たる此のスペンサーの手本に、忠實に、殆んど盲目的に從つて行つた。

　そて彼の社會し科學がら、其の性質上最も人間に交渉すべき筈の科學的領域から、人間を除外して了ふ此の滑稽なる學説を、亞米利加のウォドが一八八三年に其の『動的社會學』の中にやつたやうに嚴しく批評した社會學者は、歐羅巴には殆んどゐなかつたのだ。

　カール、マークスの如きも、フイユーと共に歴史は人間によつて造られると主張してゐながら、實際は客觀的行程、即ち或る歴史的及び社會的原因が如何にして或る社會的變化、或る社會力の變革を起すかと云ふ事、更に正確に云へば生産方法の變化が如何にして階級闘爭に影響し、又それを變革せしめるかと云ふ事にのみ耽つてゐた。

　社會主義は一の歴史力となつた。然もそれは、社會主義が個人主義的生存競爭の理想よりも更に優秀なる社會的理想を代表する故ではなく、只だ資本家制度的生産が一方に一階級的黨派としての組織されたる平民を、そして他方に社會的にでなければ使用され得ない生産力を創り出したからである。社會主義が人類の幸福を齎らすか、社會主義が個人の利害及び性質に適當するか。マークスはこれを頗る稀れに、しかも心ならずも語つてゐるに過ぎない。マーク

フとても個人を全く無視したわけではあるまい。しかし彼れは全く個人を省略して了つた。彼れは個人の歷史的及び社會的役目に就いて何等の說く所もなかつた。マークスの科學的著述の中には、進步と云ふ言葉は殆んど使用されてゐない。彼れが科學者として取扱つは問題は、只だ經濟的進化、生產力の發達と云ふ事のみであつた。

これに反してラフロフは、只だ進步及び個人的發達に就いてのみ語つてゐる。彼れに取つては、社會的進步とは只だ個人が其の全的發達を實現する一手段に過ぎなかつたのだ。そして吾々はラフロフの著述の中に、個人的利害、個人的幸福とも云ふ可き一原則に導かれる三個の異なつた定式から成る、進步の法則を見出す事が出來る。

一、進步とは、其の時代の文化に向けられた個人の批評的思想の助けによつて、人類の間に意識と眞理と正義とを發達せしめる行程である。

二、進步とは、個人の肉体的、智識的、及び道德的發達、又眞理と正義との社會的形式による實現に在る。

三、進步とは個人的意識及び社會的共同心の發達である。

更にこれを換言すれば、

進步とは、個人の意識的行程と行爲の自省的動機との發達を礙げざる範圍に於ての、共同心の發達と强固とに在る。又進步とは、個人の最大多數の間の共同心の發達と强固とを礙げざる範圍に於ての、個人の意識的行程及び自省的動機の愈々廣大なる且つ愈々明瞭なる發達に在る。

四

斯く個人は、ラフロフに取つて、單に出發點であるのみならず、亦到着點でもあつた。そして又、その助けによつて歷史が造られる道具でもあつた。歷史の中にある總ては、個人のために、個人によつて造られたものである。

ラフロフは此の主觀的見解と歷史的決定論とを甚だ獨創的な方法を以て調和さした。歷史的及び社會的生活の中に經過する總ての事は、決定論に從ふ。即ち決定された原因によつて、避くべからざる先在事によつて、定命的に生ずるものである。地質學的、物理學的、及び化學的法則の總体が人類史の可能性を含んだ宇宙的周圍を準備して、そして此の人類史の地盤を創つた生物學的、生理學的、及び心理學的法則の總ては、無機物界の進化から出た人間の出現に先在する有らゆる準備的、不可避的、定命的條件の結果である。いつ如何にして宇宙的及び有機的進化が人類の意識に到達したかは、永久に分らんかも知れぬ。しかし其の起源には何等のアルビトレールな事のないのと、及び心理現象としての此の意識が全く機械的法則に歸して了ふことの出來ないのとは、今日吾々の知る所である。此の意識には、宗教的又は形而上學的神秘主義の理解し說明する事の出來ない、或る新事實が含まれてゐる。そして此の問題を解決するのは、若し科學がこれをなし得れば、科學的方法があるのみである。此の決定論に就いては、僕自身には稍多少の疑問がある。即ち自然法の偶然と云ふ最近の哲學論は、餘程此處に考察されねばならぬ問題だと思ふ。

しかし此の宇宙的周圍と有機的周圍とを生じ、更に『創造の王』たる腦髓を賦與された人間を造り出した不可避的、定命的決定論は、此處に一轉して、人類の中に自己のための或る目的を設ける必要を感ぜしめ、此の目的を實現するに必要なる手段として

其の周圍を見るに至らしめた。宇宙的決定論の盲目的行程によつて創り出された人類の意識は、斯くして或る特殊の性質、自己の本性を有する事となつた。

此の性質の結果として、人間は、其の有する一切の手段によつて、或る目的に到達すべく活動する一存在物であると、自らを見做すやうになつた。即被創造物たる人間が創造者となつたのだ。結果たる人間が原因となつたのだ。自己の行爲が破るべからざる原因の鎖によつて決定されてゐると云ふ事を、現に確實に知りつゝも、猶自らを自由であると信ずる。自らを道德的に責任のあるものだと見做す。自らを道德的人格として聲明する。人間は恰も決定論が存在しないかの如くに行動する。即ち自働機械としてゞなく『任意的器械』として『思索する器械』として行動する。

五

ラフロフの此の主觀的歷史論を十分に理解するには、彼れが歷史と云ふ言葉に與へた意味を先づ明確にしなければならぬ。

ラフロフは歷史的生活若しくば歷史と、及び彼れ自身が慣習的文化若しくば單に文化と稱した事との間に、甚だ重要な區別を設けた。歷史的生活は、少數の智識者が歷史的傳習の諸要素に考察的批評を加へて、これを眞理と正義との方向に、若しくば眞理であり正義であると確信する方向に轉じさす事を求めた時、即ち個人的意識の發達と共に漸く始つたものである。

歷史は選ばれたる少數者の批評的思索が統治する領域である。これに反して文化の領域では、只だ傳習若しくば慣習が支配する。されば此の傳習及び慣習の上に出る事の出來ない、そしてこれに合理的批評を加へて、これを合理的方向に轉じさす事を求めない一切の個人、一企の社會的聚團、一切の國民は、歷史のそとに在る者である。今日の所謂文明社會に於いても、或はその社會的及び經濟的地位によつて、或はその精神的習慣によつて、此の歷史的生活のそとにあるべく運命づけられた個人又は全階級がある。自己の特權を享樂する事の外は考へない、そして其の他の事は總て歷史的傳習に一任する上流階級の代表者は即ち是れである。彼等は流行と慣習との奴隸である。『文明化した野蠻人』である。彼等は、それを準備し完成するために多大の犧牲を拂つた幾世代の人々の無數の努力によつて創られた、文明の一切の結果を享樂する。しかし彼等は、此の努力を續いて更に此の歷史を一歩前へ進ませる事を少しも思はない。

尤も此の『文明化した野蠻人』は、卓絕した智識的教養を有する事も出來る。榮譽と名譽とに溢れた大學者になることも出來る。世界的名聲のある文豪になる事も出來る。しかし彼等が其の推理に於て傳習的方法のみしか用ひない限り、批評的精神のない個人の群集によつて平氣に受け容れられてゐる歷史的傳習や慣習を防護する限り、慣習的文化と其の社會的周圍とを理解し批評し、且つこれを合理的方向に轉ぜしめんと試みざる限り、彼等は歷史的生活のそとに在るものである。人類の進步には用のない、若しくば邪魔になる只だの量である。

吾々の社會は、又等しく今日まで歷史的生活のそとに在つた、他の或る部分を含んでゐる。それは日々の生存競爭と過度の勞働とによつて心身を消耗し盡されて、慣習的文化に對して批評的思索を加へ、更にこれを改變せしめんとする意識的及び考察的生活を生きる閑暇も亦可能もないやうに見

える階級の人々である。彼等は文明の犧牲であった、人身御供であった。そして彼等をして、其の現實の地位と、其の無數の苦惱の原因とを自覺せしめ、更に彼等をして歷史生活に與らしめんとするのが、智識的少數者の義務なのである。彼等には、其の社會的及び經濟的地位の必然の結果として、其の可能性がある。新しき歷史を創造する可能性があるのだ。

六

斯くしてラフロフは其の所謂主觀的方法によって、歷史的及び社會的行程を分折して、歷史を構成する種々なる要素の分類を立てた。即ち各歷史的時代には三個の範疇に區別せらるべき事實がある。其の第一は過去の遺物である。次には『時代の特性的問題』即ち特殊の時代相である。そして最後には『將來の萠芽』である。

しかし歷史の此の三要素を示しただけでは不十分である。猶其の相互の關係相互の不斷の活動を研究しなければならぬ。そしてこれはラフロフが其の名著『思想史』に於て殊に取扱った問題であった。今僕は、著者が其の非凡なる博識と批評力とを示した此の未完成の著書を此處に詳細に分折して見る事は出來ない。

要するにラフロフが歷史といふ言葉に與へた其の特殊な意味は、其の著者の根本的問題即ち先きに云った個人の問題の解決を、甚だ容易にしたのであった。

個人は唯一の意識的要素である。其の欲求し考察する目的を實現するために働く唯一の要素である。從って個人は、全く意識的行程たる歷史的行程の中心に在るものである。一切の無意識的、次意識的要素は、『慣習的文化』に屬する。即ち歷史とは『批評的思索によって細工された文化』であると定義する事が出來る。此の無意識的、次意識的要素を全然歷史生活から除外し去った事は、ラフロフの過度の實證的精神が累ひした事であらう。しかし彼れの歷史哲學は、寧ろ此の點が最も重要でもあり、且つ最も興味があるやうに思はれる。

そこで歷史の唯一の意識的動因たる此の個人が、人類の歷史的發達の中に、最も決着的の、寧ろ唯一の决着的とも云ふべき役目を演ぜねばならぬのは勿論の事である。然しラフロフは周圍に對する個人の依從を否認してはゐない。個人は創造的要素であると共に、又宇宙的、社會的、及び歷史的產物である。只だ歷史に於ては、個人は此の產物としてゞなく、歷史的動因としてのみ吾々の興味を惹く。個人は、其の批評的精神の前に存在の理由を失った舊社會形式に對して、新らしき欲望と新らしき社會力とを實現せしめんとする、新社會形式の創造者である。しかし孤立した個人は無力である。其の活動をして有効たらしめんがためには、それが歷史力となり、社會力とならねばならぬ。そして斯くならんがためには、先きに云った彼の新しき歷史的生活の可能を有する勞働階級の群集と結びつかなくてはならぬ。英雄と凡人との間に深淵を穿ったニイチェの超人は、愚かにも自らの敗滅のために働くものである。孤立は殺す。

僕は、ピヨトル、ラフロフが過去の遺物と現在の問題と將來の萠芽との三個の原則を各時代に應用した其のすばらしい歷史論を茲に詳述する紙面のない事を遺憾とする。そして最後に僕は、此の紹介の材料の殆んど全部を僕に與へて吳れた、佛蘭西のマークス派社會黨首領ゲードの智識的參謀官たる哲學博士シヤル・ラポポール氏に深く感謝する。

三月の評論

安成貞雄

其の小引に於いて、『藝術に關する散漫なる感想と主觀的に失する印象記とに豊かにして、嚴正なる心理的美學的考察に乏しき我が藝術界に長く佇立することは、自分の悲しき痛ましき經驗の一つである』と云ふ、センチメンタルな告白をやつた石坂養平氏は、『特に藝術的と云ふこと』（帝國文學）で、恐らく反動的に、一種の空論に陷つた。此評論は、『藝術活動が人間の全的活動であると云ふ一切活動無差別觀を吟味』したものであるが、かう云ふ無差別觀が果して文壇の、吟味するに足る程の人々の間に行はれて居るだらうか。近時の藝術と生活に關する樣々の議論は、藝術の價値の標準に關する新説の提唱である。『藝術活動の根本性を生活の充實と直覺の鋭敏と人格の無意識的生命と生活リズムの發現とに歸着せしむる』のではなく、藝術の價値の標準を是等のもの丶具有と發露の多少に置かんとするのである。『優秀なる人格を作り眞實なる人生の經驗を積むことが藝術活動そのものであると主張する』のではなく、偉大なる藝術は『偉大なる人格者』から生れると云ふのである。そして、一般に『偉大なる人格者にして全く藝術の營みをなし得ないもの』のある事實も、特殊の人間活動たる藝術活動のあることも認めて居る。石坂氏は是れを認めないものがあると假定して、ヴント、ヒルスを引合に出して議論を進めて居るがために、空論となつたのである。併し、末流の無差別論者と、藝術活動否認論者には、啓發する所あらしめるだらう。

片山孤村氏の『誤まられたるイブセン』（帝國文學）も、同じく反動的なものである。作物の批判は裁判と同じである。作者の陳述は最も有力なる材料には相違がないが、其れによつて從來の作物の評價を誤まつたと斷言するのは危險である。イブセンが『理想を建てゝは毀し、建てゝは毀して』進んだ樣に、社會もさうして進む。イブセンに先覺たるを許す以上、イブセンの理想を社會が理想と見做すのは誤りでない。イブセンは頭の中で建てたり毀したりするのであるから、一年に一度宛でも建て直せるが、社會は實行するのであるから建て直しに長い歲月を要する。社會が今日まで尙ノラの主張を問題にして居つた所で怪しむに足らない。片山氏の論文が教へる所は、イブセン程の人でも、其理想の基礎

が科學的でなかつたが爲めに、一生遂に建て直しばかりをやつて居たと云ふことである。此の點に於いて、吾々はイブセンと共に『理想家』を笑ふものである。

文學者に社會に接觸せよと云ふ要求は、樣々の理由を根據として幾度か持ち出された。長谷川天溪氏の『寄居蟹文明の破壞と文藝』は、個人主義の消極的方面に安住して居つた國民に、寄生蟹文明の殼を破つて、自家文明の建設を奬めたものであるが、國民の生活を堅實にし豐富にし、幸福にする方面に進ましむる最適任者として藝術家を推したのは、異議なきを得ぬ。藝術が生活を愛する心を起さしむる力を有するのは、藝術家に生活を愛する思想がある場合だけである。『藝術家が自己一人を樂しましむ』るのは、其の思想を表現することにあるので、思想の內容とは何んの關係もない。藝術家が自己表現を樂しんでも他人に生活を愛する心を起さしめはしない。それには藝術家に生を愛する思想がなければならぬ。然らば、藝術家はその思想を何處から得るか。藝術家に此の思想を與へるのは何んであるか。それは社會の事實である。長谷川氏が、『文明の沈滯、國民生活の不活潑は、藝術を等閑視するからである。』と云つたのは、明に原因と結果とを顚倒したものである。藝術家は、社會既存の事實を、解釋して、廓大明白にするものである。それであるから、長谷川氏が社會の事實を指摘したならば、此の議論は一層効果を增したであらうと思ふ。長谷川氏が、文學者が社會に接し、其の現象を解釋し、批評するに、『自己を標準とするの外、何等の道もあるまい。』と云つたのにも異議がある。今迄文學者が、所謂寄生蟹生活を營んで居つた一の原因は、社會に關する智識が皆無で社會に接したので、忽ち興味を失つたが爲めではないか。結局の問題は自己であるが、攻道具は、他人の製作品を用ひるを便とする。研究法の研究の皆無なことが、日本になほ寄生蟹文明の存在する一原因である。

社會接觸論の頻繁な唱道は、田山花袋氏に『社會劇と印象派』(文章世界)を論ぜしめた。此の論に於いて、吾々は、『自己を標準』として社會を見ることが、決して社會を適當に理解し、個人との　係を明にする所以でないことを見る。田山氏に社會とは何んぞやと云ふ說明を求めるのは、或は無理かも知れぬ。求めないのは、小說家には、社會は解らないと豫想するからである。其の豫想は、どうせ獨斷だからと云ふ輕視の念から生ずる。田山氏には、獨斷でも一個の事實であらう。主觀的には、非常な權威があるものであらうが、併し、これが論文の形となつて現はれるときは、權威が全く失はれて了ふ。此の論文では、吾々は田山氏の淺膚な獨斷的見解を覗き得るに過ぎない。そして、其の見解に安住して、覺り切つた樣な態度を採つて居ることは、一種の反感を起さしめる。是れに比べると、加能作次郎氏の自分が客觀の世界をつかみ得ない不滿から遂に自分の天分才能を疑ひ、ひいて藝術の意義、價値を疑ふ程の不遜な態度に陷ると云ふ告白『自分自身に』(文章世界)が、眞劍である。

本間久雄氏の『鈴木三重吉論』(文章世界)は、小說の批評が、如何に六づかしいものであるかと云ふことの、實物敎授である。此の六づかしさは、本間氏に、『與へられたる藝術品を藝術そのものとして』、一度『鑑賞の世界に閉ぢ込め』たまま批評せしめ、またその世界から引つぱり出して、『更にこれを吾々の實人生の倫理批判の境地に推し及ぼして觀察』せしむると云ふ二重の手數を取

らしめた。おくみが、籠ぢ込められたり、出されたりして、柔しい魂をはつきり見せないのは、彼女の爲めに遺憾である。

金子筑水氏が、昨年社會生活の形式を考察した時、吾々は、其の思想の朦朧として要點の所在の捉へ難いのに苦んだが、『西歐文明に現はれたる二種の典型』(早稻田文學)は、氏の學者としての價値を疑はしめるものである。詳しくは雜誌『大正』創刊號で論じて置いたが、歷史的事實をも、論理をも無視して豫定の議論を進めながら、人に迫る獨斷の權威もなく、思想の警拔もない一場平凡の談義となつたのは、氏の思索力の問題となるものである。

長谷川天溪氏の『英國劇壇の回想』(早稻田文學)は至極親切な記載である。たゞ英國劇壇が十九世紀の末代に至るまで不振を極めた理由五箇條を列擧しながら、萬國版權同盟が無かつたことを逸したが爲めに、劇壇の沈滯を破らんとする運動が如何にして起つたかと云ふ說明が付かなくなつた。經濟上の基礎なしに、劇の新運動は起らない。新劇團が起つても、其脚本は天溪氏の所謂寄生蟹たる翻譯であつて創作は生れない。

文學者が社會に接觸しなければならぬと云ふ主張と共に、人生と科學との關係や交涉も幾度か論議されたが、自己保存本能と、社會本能とを正當な關係に於いて理解し、社會生活の意義と人生に於ける科學の價値とを認めた議論は、吉江孤雁氏の『生命の力』(早稻田文學)に見られる。吉江氏は、永い間の觀察と思索とによつて、此の正しい見解に達したものらしい、たゞ、是れが爲めに人類の古代生活に關する智識が誤つて居るのは、吉江氏の爲めに惜しむべき事である。『彼等古代人は全然天然の前に身を委せてゐた』のではない。人と云ふ名稱は既に天然と戰闘を開始したものを指すのではないか。併し、かう云ふ二三の點を除いて、吉江氏の論文は、總体に春の夕汐の樣な、柔かい、然し強い力を以って讀者を浸さなければやまぬ。

稻毛詛風氏の『生の激流と深潭』(早稻田文學)は、吉江氏のものと反對に、讀者に何物をも考へる餘裕を與へずに、滔々とまくし立てたものである。稻毛氏は生、自我を既知のものと見做して、その土臺の上に、生の激流と生の深潭と云ふ比喩を作つて、論理的遊戲を恣にして居るが、讀者は其の中に、淀みなき文章と、論理的明斷を誇る論者とを見るに過ぎない。是れは、實際自己を改造する力のない人の精神的手淫である。相馬御風氏が『評論界の新生面』(生活と藝術)で與へた警告は、稻毛氏へ宛てた樣なものである。

相馬御風氏の『本當の自分に歸る時』(早稻田文學)は、此の警告を敷衍し、更に別に創作及び實生活に對する要求を持ち出したものである。即ち評論家に向つては、抽象的な議論を捨て、新しい表現生活を營めと云ひ、創作家に向つては、內外兩面に於ける豐富強烈な生活へ向上努力し、『如何に生くべきか』と云ふ手近かな問題に象徵された要求の具体的表現を要め、實生活に於いては、イプセン、トルストイの闘つた生命の闘よりも、『日本と云ふ小つぼけな、愚にもつかぬ國の住民、野蠻極まる政治治下の人民として『本當に考へ直して見なければならぬ』と主張して居る。

此の論文で著しい點は、究局一の新國民主義とも云ふべき主張に達したことである。長谷川天溪氏が一月以來唱道したのも、新國民主義である。文學者の社會接觸論が、こゝまで推移した。今後如何に轉化すべきかは、注目に値ひする。

相馬氏が此の論文で、實生活の革命を主張し、『內的革命と外的革命との間には決して時間的に前後の別があり得べきものでない』ことを說いたのと反對に、思想其れ自身を一の實行だと說いたのは、片上伸氏の『思想の力』(早稻田文學)である。片上氏は『罪と罰』のラスコーリニコフが殺人罪を犯した後、不安恐怖を感じたのは、『其の考へたことは、單なる頭の中の理窟であつて、彼自身の力――生命の中から作り出されたもの』でなく、『彼自身の本當の力――本當の生命の表現ではなかつた。即ち、彼自身の本當の思想でなかつた。また隨つて勿論本當の實行でなかつた。』からだと說き、思ふといふことは深刻明白な實行であつて、最も深く思ふことは、最も深く生命の力を感ずることである。思ふことの力は本當の生命の力であり、其深さは生命の深さであると說き、思想の世界は無限で、外界の一切有限の世界は、內の世界の表現に過ぎない。內の世界の自由な力を有たない一切の外の世界の表現は、根の淺い哀れなるものであると說いて居る。『自ら深く思ふことによりて深く生き』是れによつて、『徐ろに自己を知り、自分を明るく開き顯はして行くべきである』と說いて居る。斯くの如く片上氏は肉体的活動の前の思想の充實を力說して居る。が是れは明に、思想の發達の一面を閑却したものである。心理學者に從へば、肉体の活動其ものも一の思想を產む。思想の健全なる發達は、思つて行ふこと、、行つて思ふことの兩面からでなければ期し難い。片上氏が內の世界の自由、思想の自由といふことを高調したのは、外的、肉体的實行から遁避せんとする口實ではないか。思想が實行であると說いたのは、無用意の實行論に對する反動とも見られるが、また一種の自己辯護ではあるまいか。併し、すべての哲學が一種の自己辯護であるとすれば、此の片上氏の論文は、最も立派な、巧妙な辯護の一つであらう。

■近代劇協會のノラ

近代劇協會は、第八回興行として、四月十三日から七日間、有樂座でイプセン作森鷗外譯『ノラ』、及びハウプトマン原作『ハンネレの昇天』の一部と二部とを上演し、ノラには衣川孔雀が扮して、敢て松井須磨子と優劣を競ふそうだ。

くらやみに

徳永保之助

新宿行きの夜の電車、とびのれば、電燈はうす
　暗く、
その下にぢゞい、ばゝあ、
金ありさうな赭ら顔の肥つた男、
酒くさい勞働者連、
かれらのみ互ひに何事か言ひ爭ひ、
その大聲がガラス窓につき當つて、
はねかへされる、
隅ッコのだらしない年増女、酌婦か、
どれもこれも醜い面だ、
じろじろとナゼ俺を見る？
喧嘩の後の、眞赤にたゞれた俺の心に、みんなし
　て觸りやがる！
イヤな電車、
イキナリ飛びおりた。
チヨツ！
何時の間に雨が、——

走り去る電車の後から、
暗い冬の夜の空から、
寒い風に追ひおとされて、
そしてたちまちどしや降りに、
その中を人は見出された獸よりもあわてゝ走る。
俺も仕方が無い、
とある空家の軒下に、
くらやみに、
雨に伴ふ急な寒さにふるへながら。
俺のバカよ。
あの電車にのつてれば、
今頃はとつくに向ふへついてるものを！

凡人のために

土ばしの袂の乞食、
京橋の巡査に追ひ立てられると、
芝區へ去り、
それとあべこべの時、
京橋へ逃げ込むと云ふ。
話しは別だが、われわれも、
ある相對する勢力の存する時、

又、たとへ下らぬ實際の問題に對して自分の意見
　を決める場合でも、
（その時、決してイエス、ノーを云ふ勿れ。
要領を得ない言葉と曖昧な行ひとを以て、
その間に橋をわたして置くにかぎる。
どつちへくつ付いても差支へないやうに、
まかり間違つても、
食ひはぐれのないやうに。

眞夜中の風

冬の夜の二時頃、
われはふと目覺めたり。
あはれ大風が屋根の上を走り歩き、
軒をすべり落ちて、
窓の戸によりてふるへをれり。
限り無く、はてし無き暗はすべての障壁をやぶり、
わが部屋にも忍び入りて、
もろもろの怪しき幻像を、
その中に醸す。
急に且つはげしき目覺めにおどろけるわが心臟の
鼓動は熱き額の上にまでのぼりて、
暗の中に、はげしく足踏みしてもだへをれり。
わが傍に、
兄は昏々としてねむれり。
そのかすかに平らかなるいきの通ひを聞けば、
ねむりの深さのはからるゝなり。
すべて眞夜中を知らざるものこそ幸ひなれ。

かれらは眞夜中の暗のおびやかしを知らず、
その暗の中より來る、何とも知れぬいとかすかな
　る物音の怕れを知らず、
たゞわれは常にひとり眞夜中に目覺む。
然して暗の中にみ　から描けるさまざまの幻の、
　明方の光と共に消え去るをかなしむ。

今も我が兄は荒べる風の音にさへ、
安けきねむりの領域を固くまもりて、
何者にもそを侵さるゝことなし。

オー風よ、
いたづら子なる夜の大風よ、

もはや戸によりてふるふを止めよ、
疾く飛び去れよ、
高き空にかけあがりて消えよ、
天のあなたなる雲の洞穴のくらきにかくれて出でざれ、
夜よ、いざわが上にねむりの柔かなる掛衣を再び蔽へかし。

あゝされど忽ち前よりも暴き力をもてる風はおそひ來りて、
さらに屋根の上に翔り始めたり。
かれらの飛び跳ぬる勢ひは軒の廂をやぶるべし、
かれらは時に地上をひた走りに走り且つ互ひに追ひつ、
礫と砂に窓をうちて喜び合へり。
オーかれらの奏する樂音のさわがしさよ、
かれらはたゞ一種の樂器——煙突の如く黑き大いなるクラリチットを吹き鳴らすのみ。
樹木の群はその音といきほひにおびえて、ひたぶるに號泣す。

オー風よ、
わがねむりを奪ひ去れる風よ、
もはやその笛を吹き止めよ、
汝らのハアモニ無き樂の音は聽くに堪へず、
そはしめやかに沈默せる『夜』の舞踏の群を、
いゝ、
ちりぢりに姿を消さしむ。

あゝ詮なし、
すでにわが目はあきらかに、
わがあたまは火の上の赭き煎じ藥の如く、
泡立ちて熱しきたれり。
つひに今宵も、
窓ほの白むあかつきまで、
苦しくもまたかなしくも、
われは果しなくわが身の上を思ひつゞくらん。

大久保より

同人

■題は『大久保より』だが、實は京橋の賣文社で、校正をやり乍ら書くのだ。

■廿一日の朝、青年會舘に故平出修氏永訣式があつて、社からも大杉、僕、二郎などが往つた。當日堺は弔文を朗讀する筈だつたが、遂に姿を見せない。後で聞いたら、日を間違えて居たんだそうだ。歸りには長谷川天溪、相馬御風、馬場孤蝶、土岐哀果の諸君と一緒に、神田の常磐で晝飯を喰つた。天溪御風二氏に別れてから、或るカフエに入つて、堺と貞雄とを電話で召集し、一行七人夜おそくまでヨタリ歩いたので、馬場氏はお客に待ち呆けを喰はせ、土岐は音樂會に往き損ひ、大杉は鎌倉へ歸り損つて了つた。

■實業之世界社長野依秀一君が、十六日に出獄した。元氣だが流石に疲れたと見へ、今は箱根で靜養して居る。

■百瀨晋は賣文社を飛び出して、今は鎌倉の大杉の處に居る。彼の新綽名をジョン・タナアといふ譯は、バナアド・ショウでも氣が付くめえ。（寒）

■僕と二郎とは、四月から『大正』と云ふ雜誌を出す。と云つた所で、人に雇はれて編輯するのである。が併し、かたりな自由を保持して、殆んど自分のもの丶樣に出來る。『大正』は其型近代思想二倍版、頁百二十、英米折衷の編輯法による大雜誌である。主として歐米の思想界、科學界、政治界の出來事を紹介し、側ら、支那、南洋、フイリツピン、濠洲、南米、北米等日本と直接に關係ある土地の狀況を報道する。日本の問題にも、十分の注意を拂ふことは云ふ迄もない。

■初號の飜譯に手傳つて呉れたのは、荒畑寒村、佐藤緑葉、土岐哀果、福永挽歌、德光衣城、永代靜雄、若月紫瀾の諸君である。秋田雨雀君も每號劇に關する記事を寄稿して呉れることになつて居る。

■本號で完結した、佐藤緑葉の『人間屠殺所』は、近いうちに某書肆から出版される。緑葉は、別に原著者の評傳を作つて之れに添へると云ふ。

■二郎も、歌集『貧乏と戀との歌』を、某書肆から出す。

■僕は讀賣で山宮允氏から無學だと云はれたので、それだけでも解いて置かうと思つて、『生活と藝術』で同氏に再質問を提出して置いた。（貞雄）

新刊紹介

■ショウ警句集（荒畑寒村譯）

寒村はショウが嫌ひである。『ショウの奴め、こんな事を云つていやアがる』とぷん〳〵怒りながら翻譯して居た。併し是れを以て、此の翻譯が、ぞんざいであると速斷されては困る。十分一字一句の末まで理解して居るから、ショウの言ふ所を批評し得るのである。好きな物を譯す時は、興に乘ずる誤解があるが、嫌ひなものは却つて氣が減けるから間違がない。嫌ひなショウを譯して原稿料にしたのは、事それ自身が一の警句である。敢てショウ好きにすゝむ。（貞雄）（五十五錢神田南神保町泰平舘）

■女と惡魔（安成二郎譯）

女と云ふ謎に對する解案の翻譯である。解案者には、歐米の哲學者、宗教家、小說家詩人等四百人ばかりある。讀者は是等の解案中に、必ず自分の解案と一致する點を見出し得る。女が謎であると云ふのが、最良の解案であるが、倘他人の解案を參考にする事が、女に對する强味を增す。此の意味に於いて、本書は女に對する戰術書である。（貞雄）（四十錢牛込矢來三、新潮社）

生活の欠伸

寒村

■

若し『近代思想』に、僕等の思ふ儘の事が自由自在に書け得たら、僕は雜誌を作るのが愉快で、樂であるばかりで無く、『近代思想』をどんなにいゝものにされるか解らない。雜誌を善くするには、思ふ事を自由に書かねばならぬ。然るに思ふ事を自由に書かうとすれば、すぐ政府から『こういふ惡いものを書くなら止める！』と云はれる。然し、よく考へて見ると、僕等の考へて居る事は、政府にとつては皆な惡いらしい。そこで惡くない事を書かうとするには、止むを得ず平素余り考へず、思はざる事を書く事になる。而してその結果は、雜誌を作る事が非常に苦痛となり、作られた雜誌は、よくないものとなるのである。

■

些し以前、或る人から大分年代を經た唐墨を貰つて來た。買へば何でも五六十圓するものだといふ。然るに、僕は此の一挺五六十圓する唐墨を磨り減らして、一枚僅か五十錢の原稿を書いて居るのである。立ん坊が一度に二三錢の仕事をするのに、四五錢する草鞋を穿き、學校卒業生が三四十圓の月給を取るのに、數百、數千の學費を使ふやうなものか。

■

貧乏に苦しんで居る勞働者が、彼處へ往つて頼めば、屹度いゝに違ひないと思ひ込んで、或る日、自分の選擧した社會黨の國會議員の許へ尋れて往た。すると先づ玄關先で『そういふ名の人は一向知らないが、一體何の用だ。』と取次が問ふた。ハテ、こんな筈では無いがと思つたが『實は吾々勞働者の生活狀態をお話して、議會で、勞働者の暮しがもう些し樂になるやうにお取計らひが願ひたくて上りました。』と、恐る恐る云つた。取次は一先づ引つ込んだが、再び玄關に現はれて『切角ですが、只今は議會の開會中で、自黨議員の操縱や、反對黨に對する策略やらで、多忙を極めて居りますから、閉會後になつて閑暇が出來たら、どうかお出でを願ひます。』と答へた。勿論、これは普通選擧が行はれてから起つた話で、決して今ある話では無い。

■

楠山正雄といふ男が、先頃の讀賣新聞に、『愛國心といふ者は、西洋かぶれの社會主義者が云ふやうな、下らぬものでは無い。』と云つた意味の事を書いて居た。是は明らかに、日本の社會主義者を指したのだらうが、此の言葉自身が既に、彼が愛國心に對する社會主義者の議論批評に就て、全然無智だといふ事、及び不正直な嘘吐きだといふ事を示して居る。一体楠山などいふ男は、文學論をやつたり、演劇論をやつたりする時、西洋人の名なんか、一言半句も筆舌に上さない人間だらうか。また彼等は、西洋に起つた或藝術上の運動の主義觀念を以て、日本の藝術界を律しやうとはしなかつたらうか。苟くも社會制度そのものより生れ、近代科學の上に基礎を据ゆる主義思想に對して、こういふ事を云ふ人間は、必ず劣等な情落者である。『社會主義はバルカアだ』なぞと、臆面も無く公言した德田秋江だの、楠山正雄だのと、文士には如何してこう生意氣な知つた振りが多いのだらう。

■

資本家連中が夢中になつて、賭博に耽つて居た。と、一人が舌打ちをして怒鳴つた。『チョツ、また一千圓の損か。まるで底の無い穴へ、抛り込んで居るやうな者だ!。』すると、他の一人が冷笑して答へた。『ヘツヘ、まあそう苦情を云ひ給ふナ。ナーニ、譯は無いよ、坑夫がその底の無い穴へ這入つて、すぐ取返して來て吳れるから。』

■

襤褸は紙を作り、紙は金錢を作り、金錢は銀行を作り、銀行は擔保品を作り、擔保品は利子を作り、利子は貧困を作り、而して貧困は再び襤褸を作る。

■

短かき勞働時間は、多大の賃銀を意味す。

■

鶴嘴、ショベル、鐵槌は、ペンや、劍や、十字架よりも強い。

■

『賣文社、そこも永くは勤まらず、わが飽き性ぞ悲しかりけれ。』へちまの花第一號に、僕はそういふ歌を書いた。實際、僕の飽き性と來ると、吾れながら呆れる位で、何處に勤めても、一年以上續いた驗しが無い。千葉監獄には一年半居たが、こればかりは、いくら飽きたからと云つて、勝手に暇を取る譯には往かなかつたのである。或る時、人に此の話しをしたら、『それは無理も無いサ。好きな事は何も出來ず、是非共しなくちやならないのは、面白くも無い、厭な仕事ばかりだもの。』と云つた。嘗て何かの本で、欠伸といふ者は、神經が單調な一つ仕事に飽いて來た時、その疲勞倦怠を緩和する爲めに、緊脹した筋肉をリラックスさせやうとして、自然に起る生理作用だといふやうな事を讀んだ。して見ると、僕の飽き性の如きも、厭な、面白くも無い仕事を、無理に詰めてやる結果として、自然に起る生理作用に違ひない。そして此の生理作用が起した轉業、若くは浪人生活といふ欠伸に因て、僅かに神經や筋肉の悶殺する如き疲勞倦怠から救はるゝのである。あゝ、肉体の欠伸!、生活の欠伸!。

■

富める者の監獄に入るは、駱駝の針の穴を通るよりも難し。

■

理想家が改革家に問ふた。『君が若し露國の皇帝だつたら、先づ如何するネ。』『先づ土地の私有を廢するネ、それが根本だからナ。それから退位するが、君なら如何する。』理想家は云つた。『私は最初に退位する。そして、土地の私有を廢すべき事を人民に教へる。君は如何だい。』改革家はこう答へた。『私なら、彼等が私有制度に因て、また彼等の皇帝に因て、壓制されて居るのだといふ事を、玉座の上から人民に教へるヨ。』

■

神若し存在せずば、權力階級は神學者に命じて、拵え上げさせるだらう。何となれば、神、惡魔、天國、地獄などといふ思想は、大多數の無智なる貧民にとつては、數萬人の警察官よりも恐ろしいのだから。そして、そして若し、神に宇宙的警視總監の位置を賦與するに非ずんば、彼等は今の數百倍も、警官や兵隊を增さなければなるまいから。

胡麻鹽頭

貝塚 澁六

■ショウの馬泥棒の道德觀に關して、伊庭君と僕との意見が相違した。所が伊庭君は僕が『有名なショウ通である故』沈默して居られぬと云つて、本紙の前號に、馬泥棒の中の文句を引いて、それを證據書類として僕に對決を要求した。

■僕は之に對して、先づ僕が『ショウ通』にあらざる事を斷つて置く。最も、是は斷るに及ばないかも知れぬが、念の爲め斷つておく。そこで僕は、兎にかくショウの生かぢり者として、今一應僕の考だけを述べる。本當のショウ通諸君、願はくば教示を吝むこと勿れ。

■伊庭君は馬泥棒ポスネットの言葉を幾つか引用して『これだけの言葉で見ると……この戲曲は道德的慾情の桎梏を苦痛と感じてゐる見方としか思へない』と云つて居る。然しポスネットの言葉が其まゝショウの意見だといふ證據がどこにある。ポスネットの言葉が其まゝ此の戲曲の主張だといふ證據がどこにある。

■ポスネットはショウほど徹底した、ショウほど自覺した本能論者ではない。そこで世の善人がる人々に對して彼は惡人がる事になつた。そして善人がる人々が實際に於て惡を爲すと同じ樣に、彼は惡人がりながら實際に於て善を爲した。既に惡人を以て自ら任じて居るが故に、自己の善行の理由が分らなくなつた。そこで『神のわなにかかつた』とか、『神につかまつた』とかいふ語を發するに至つた。

■性善說から行けば、人間の惡をなす理由が分らなくなると同じ樣に、性惡說から行けば人間の善を爲す理由が分らなくなる。ポスネットは性善說に對して猛烈に反抗したが、其代り自分は性惡說に陷つたから、矢張り人性全部の解釋がつかなくなつた。そこで彼も矢張り性善論者と同じく神を認めればならぬ事になつた。そして其の神に反抗せねばならぬ事になつた。

■伊庭君はポスネットの此の立場を見て、それが其まゝショウの哲學、ショウの人生觀であると極めた。

■ショウは『人と超人』の序文の中に斯う云つて居る。『予は彼れの(主人公タナアの)意見に對して、及び予が劇中の諸人物の意見に對して、決して責任を避ける者ではない。それらの意見は、それ〴〵の立脚地から見て皆正當である。而して其のそれ〴〵の立脚地は、其の劇的瞬間に於ては、即ち亦予の立脚地である。』故にショウはポスネットの立脚地に對して決して責任を避ける者ではあるまい。其の意味からすれば、伊庭君の言分も一應尤もになる。然しそれはショウの謂ゆる『其の劇的瞬間に於て(For the dramatic moment)』である。それを以て直に其劇全体の與へんとする教訓だと見る事は出來ぬ。

■ショウは本能論者である。本能論者とは本能を是認し、肯定して、それを滿足せしめ、發展せしめんとする者である。世間の道德家、宗教家は非本能論者である。即ち性慾、食慾、物慾等の本能を否定し、抑壓せんとする者である。そしてそれを抑壓する力として、神とか良心とか理性とかいふ物を借りて或は拵へて來るのである。

■ショウから云へば、良心も理性も同じく一種の慾情である。『人と超人』の中の、タナアとアンとの問答にこんな一節がある。アン『そりやあんた分り切つてるぢやなくつて。道德心で慾情を制するのだわ。』タナア『道德心！それも慾情ぢやないか。我々

には慾情と善心とが別々にあるんだとあなたは思ふか。若し道徳心が慾情でないならば――慾情中の最も絶大な者で無いならば――外の慾情が皆んな寄つて、つむじ風の前の木の葉の樣に、道徳を吹き拂つて了ふだらうぢや無いか。』是はタナアの言葉だけれど、其まゝショウの解釋だと認むべき理由がある。

■つまり、ショウは、慾情と道徳心との二元論を棄てゝ、慾情一元の本能説を取つたのである。そして總ての本能の矛盾と調和とを考へて、其の滿足發展を望んで居るのだと思ふ。

■然るに伊庭君の如く、ショウが道徳慾を否定して、それから脱却しようと勉めて居る者だとすれば、ショウは本能論者ではなくなる。性慾や食慾の本能ばかり滿足させる事を勉めて、道徳慾の本能を棄てようとするのならば、まだ徹底した本能主義者ではない。

■既に道徳心を慾情と認め、本能と認めながら、猶それから脱却しようと勉めるのは無理である。それが出來る位ならば、性慾や食慾から脱却する事も出來る筈である。故に、性慾や食慾を否定しようと勉める道徳家宗教家も、道徳慾を否定しようと勉める『近代人』も、僕から見れば同じく不徹底な思想家である。ショウはそんな不徹底な思想家ではないと思ふ。

■古い唯物論者が、二元主義の有神論に反對し乍ら、自分も矢張り二元論に陷つたのは、此の『近代人』の態度に能く似てゐる。『近代人』は道徳を以て本能を抑壓する事に反對して、其の結果、道徳心を本能以外に排除して、今度は逆樣にそれを抑壓しようとして居る。即ち是も二元論に陷つて居る。

■伊庭君は最後に、『堺氏の樂天的樂天説よりも、自分の樂天的悲觀説の方が、ショウにも近く、また餘計近代的ではないかとおもふ』と云つて居る。

■僕の言分が樂天的樂天説で、伊庭君の言分が樂天的悲觀説であるかどうかは、僕によく分らないが、僕は兎に角、伊庭君の現在滿足主義よりも僕の將來希望主義の方がショウに近いと思つて居る。そして伊庭君の考が僕の考に比して『餘計近代的』であるか否かは、全く此の討論に關係のない事だと思ふ。

■若し此上猶この討論が續くならば、僕は今一度委しく馬泥棒の原文を讀んで、又鷗外君の譯文をも讀んで、色々確かな證據を擧げる積りであるが、今度はこの位な抽象的な所で御免を蒙つておく。

■只一つフト目についた一節を追加として擧げておく。結末の所に、ポスネットが『あれも(フイミイも)惡人の失敗者だ、俺も惡人の失敗者だ』と云つて、フイミイに二人結婚しようぢやないかと云ふと、フイミイが『有がたう。だけど、私が結婚するんなら、自分で自分に驚いたりしないで、本心から善い事の出來る男と結婚しますわ。あなたは丸で新しい玩具を持つた小供の樣だ。』と云つて居る。是はフイミイに云はせた言葉だけれど、ポスネットがまだ十分徹底せず、道徳欲に發してまた十分の自覺も理解もない事を評した言葉であると思ふ。

■伊庭君は又、『偉大な洒落』といふ事を皮肉に考へると云ふが、此の言葉はまだ不徹底な、新しい玩具を珍らしがるポスネットの使つた言葉であるから、妙な響きを持つて居るけれども、之をショウが人生を罵倒する皮肉だと見るのは甚だ淺薄だと思ふ。若し人生其者の根本を罵倒して喜ぶ樣ならば、ショウの『生の力』の哲學は無くなつて了ふ譯である。

主の家にて

―此の一篇、何人の作なるやを知らず―

荒畑寒村譯

　日は灰色で、そして寒い。雲厚く鎖した天は、濕つた霧のやうな蒸氣に大氣を充されつゝ谷の横ぎれる際涯無き濕野の上に低く垂れて居る。此處彼處、冬の嵐に惱まされた、僅かな、裸かの、生命無き樹が見える。そして、その間に見える地面の暗い縞は、新らしく雪が解けて、その下の深い黑い粘土を顯はしたのである。腐つた壁は、溶解と雨との作用で、一層暗い色となつて居る。小さな壓し潰されたやうな小舍の、慘めな散亂せる村落は虛しく、また荒廢して立つてゐる。時々、壓迫するやうな沈默は、哀れな飢えた牝牛の、悲しげな鳴き聲で破らるゝが、然し、次の瞬間には此の墓場にも似たる深い、息詰らすやうな沈默が、再び支配するのである。此の憂欝な繪畫の周圍の一切は、偉大な、亡ぼすやうな、賴り無き悲哀の感を與へる。そして、人は、恰かもそれから遁れる事の出來ない、或る不運な、災厄に充ちて居るものが、此の慘めな村の上に沈思して居るやうに奇異な、苦しい感情を覺ゆるに違ひない。

　人は急に、時代の着いた壁を通して、古い、ひゞの入つた寺鐘の、鈍い、寂しい音が滲み出でて雪を頂いた野を超えて消え往く、近い古い鐘樓からの、弱い、裏んだやうな響きで、憂欝は默想から醒まされ、その音は、耳に達すると、重い嘆息か、或はおづおづした祈りに變へられる。

　かゝる物悲しい鐘の音は、今は早や、靜かに音も無く地に落ちつゝあるその涙をとゞめ兼ねた、暮れ往く雲深き空に、同じやうな力をもつものらしく思はれる。

　銀髮の、墓の淵によろめいて居る、村の老祭司教父ジョンは、その慄える、辛うじて聞き取れる聲で、晩禱式を唱し始めた。

　襤褸を着て、瘠せた、蒼い、黃色い、弱り果てた顏をした幾人かの百姓は、宗教的狂熱と、飢の惱みから起つた恐ろしい熱とに燃ゆる眼で、神像（アイコン）の粗い、まつ黑になつた姿を、ジッと見詰めて居る。夜の陰が既に入りそめた、小さな田舍寺の、

暗いズーッと隅の方で、人は謹ましやかな囁き、また稀れには、弱い、無理に殺した咳を聞く。

晩禱式は終つた。敎父ジョンは、自らその襤褸になつた袈裟を脱ぎ、祭壇の前に短かい默禱を凝らし、そして瘠せた、見苦しい、血に染みた基督の附いた大十字架の傍の、小役僧に因て、敎會の唱歌隊の中に建てられた、高い衝立の背後に往く。會衆の或る者は、鈍い焔ほの搖らめく、細長い、蠟燭を運ぶ――多くの者は、彼等の信心の此の徴やかな印しさへ、購ふ金が無いのである！――そして今一人づゝ、靜かに衝立の方に進み、代る代るその背後に消えては、懺悔をするのである。他の者は、その間、速やかにまた機械的に、その唇を動かしつゝ、熱心に畵く十字と、低頭と、深い嘆息とを伴つて、彼等が辛うじて了解する言葉の數々を呟やく。衝立からは、苦しみを以て慄え、場合の嚴肅と恐怖とを以て徹した、含差んだ、低まつた聲が聞えて來る。

急に、人は懺悔者の最後の言葉を聞く、懺悔を終つた、高い、瘠せた農夫は、衝立の背後から歩み出る。彼はその壞血病で膨れ上つた脚を動かさうとして、非常に骨を折る。然し彼は、有頂天で晴々としてその顏は美しくなつたやうに見へる。小さな皺寄つた老婆が彼に代つて、衝立の背後に入る。

『敎父さま、聖者さまに淨められた蠟燭を持つて參りもしないで、あなたの前に出ることを、基督の爲めにどうぞお恕し下さいまし。』

彼女は、その古い精神の指導者を、悲しみに充ちた眼で見詰めながら、呟いた。

『神さまは、勿論、あなたをお恕しなさらう。』敎父ジョンは、低い悲しい聲で答へる。

『噫、そうです。神さまは如何にわたし達が惱んで居るか、如何にわたし達が貧しいか、御存じで居らつしやいます。金といつては鐚一文も、麪麴と云つたら屑一つも、わたし達の家にはありはしない……。』

こゝで彼女は、敎父ジョンの緩い、無器用な手付で、その濕つた、尠い髮を撫でた後、同じ悲しげな、憐れつぽい調子で語るのに遮ぎられた。

『もう澤山です、お友達。わたし達は皆、もう些し善い暮しをしたいとばかり考へて居る。わたし

達の神に對する罪は大きい、そして神は、お怒りになる權利をお持ちです。』

『オヽ、さうです。わたし達は皆、大いなる罪人です。そして、わたし達は、自分の罪の報ひを受けて居るばかりです……。』

『さア、あなたの罪を懺悔なさい。何も隱しては可けません。そして、全知の神は、あなたの心の隅までもお見ほとしなさる事を、思ひ出しなさい。』

『聖なる父、わたしの罪は多うございます。わたしには何から云ひ出して宜いやら、解らない位です……。わたしを助けて下さい……。わたしに尋ねて下さい。』

『あなたは、神の全知なる命令に就て、愚痴をこぼした事がありますか。』

敎父ジョンは、ややに迫り來る暗黑に因て隱されて居る、屋根のヒヾと、不完全とを見上げた時、こう聞き始めた。

『はい、聖なる父、わたしは懺悔します。わたしは愚痴をこぼし、苦情を申しました。そして、わたしは大いなる罪人でございます。』彼女の唇は、痙攣的に動き、そして、焦がすやうな涙は、その黑い、皺寄つた頰を押し流れるのである。

『長い間辛抱して、わたし達は惱みもしましたし、勵みもしました。…… オヽ、あなたは誰れよりも、如何に飢と病がわたし達の間に流行つて居るか、わたし達の慘めな家庭は、如何なものだか、よく知つてお居でなさいます。わたし達の力は、今はもう衰へ切つてしまひました。わたし達は、絶望の淵に居ります。そして、狂氣に捉はれて、天に叫ぶのです。「主よ、吾々をお罰し下さい。吾々の惡行の爲めには、打ち碎いて下さい。けれ共、子供達だけはお救ひ下さい。彼等は、あなたに逆らひはいたしません。」さて、わたしの身でございますが……、第一に、息子の女房が死ぬと幾日も經たないで、息子も亦墓へ參りました。彼等は遺產として、四人の、小さな、賴り無い子供をば、わたしに殘して參りました。わたし共のブッ毀れ小舍に在る物は、何一つとして賣るか、質に入つてないものは無く、一と碎の麵麭も、暖かい布團も、哀れな、小さな、頑是無い者にやる事が出來ません。年とり、弱り果てゝ、こういふ色々な悲しみ

に負け切つて、わたしは何時でも墓に下る準備をして居ます。わたしに殘つて居る事は、お祈りばかりです。「全能の主、吾等を此處より救ひ給へ。而して凡て吾等を此の涙の谷より、御身の許に取り給へ。」わたしは、凡てこういふ言葉が罪深いのも、人にはこういふ祈りで神に近づく權能の無い事も知つて居ます。眞實の基督信者は、辛抱してその惱みを堪へ、そして、主が彼を召し給ふ時を待つて居るものです。聖なる父、わたしはもう、悉皆あなたに申しました。罪を懺悔しました。そして、わたしに當る罰をおとなくしく受けます。』

『小さい母よ……、氣の毒な友達よ!!。』

敎父ジョンは穩やかに云つた。

『誰だつて、わたし位よく、あなたの此の世の惱みを知つて居る者はありません。そして神さまのみ、如何にわたしの心が、吾々の憐れな國、吾々の辛抱強い、單純な、また信心深い人々を考へては、破れ裂けて居るかを知つてお居でになる。然し、わたしの役目として、神の御旨は神聖である、その御許しなくば、一羽の雀も地に落ちぬ。そして祈りと堅い信仰に因てのみ吾々凡てに對する救ひがあるといふ事を、あなたに知らせる義務があります。』

低れた頭と、迸る涙とを以て、哀れな老婆は、敎父ジョンの嚴そかではあるが、優しい言葉を聞いて居る。汚い、小さな手布の隅で、彼女はその眼を拭つた。そして、非常に興奮して、敎父ジョンが是れから云ふ事を待つて居た。然し、死ぬ迄に悲しんで居る敎父は、その瞬間に、恐らくは彼女が犯したるべき他の罪を、懺悔させる爲めに尋ねる事は、到底出來ないといふ事を感ずる。習慣の力から、彼は斷食を守つたかと、すんでの事に彼女に問はうとした。が、幸ひにして、彼はてふどい〻時に、過ぐる數週間、その敎會員は大抵、食物が始終得られない爲めに、まづい、不自然な代用物を用ひて居るので、麵麭と水の如きは、贅澤品と思つて居る事を思ひ出して、顏を赤くしながら止まつた。

『あなたは怒つた事、誰か隣り人を罵つた事を思ひ出しますか。』

彼は、數分間沈默して居た後に、こう尋ねた。

『聖なる父、わたしは大いなる罪人です。わたし

は時々、村の隣り人を、惡口雜言した事がありませう。』

『わが友よ、それは大きな罪です。基督が彼を苦しめた者の爲めに、お祈りなされた事を、何時も忘れては可けません。あなたは、しよつ中、主の家へ詣りましたか。』

『あゝ、聖なる父、わたしはそれさへ滿足にいたしません。然し、わたしはうす暗い家を滅多に離れる事は無く、子供達は始終わたしの世話が要りますし、教會へ連れて參るには、皆あまり小さ過ぎるのです。それに、子供達は、まる裸と云つても宜い位なものですから……。』

淚は彼女の聲を塞いでしまふ。そして、心の優しい祭司は、美しい、保護する如き手振りで、その寛袍(エピトラヘリオン)の摺り切れた裾を、低く垂れた彼女の頭に横へる。教父ジョンは、それから圓天井の暗い窖を眺めて熱心な信頼した言葉で、彼がその瘠せて骨ばつた手を伸べて、祝福を祈つて居る哀れな、跪まづける者に、惠みを乞ふ祈りを語つた。

老婆が懺悔を終つた後で、今度は髮の光つた、摺り切れて口を開いて居る靴を穿き、つぎはぎだらけのジャケットを着た青年が代つた。その後には、もう臨月に近い、鋭い鼻の、大きな、恐怖に充ちた眼をして、出血して居る唇の間からは、壞血病で膨れ上つた、腫れた齒基の仄見ゆる女が來た。

此の女の後からは、頭の禿げた、豊かな鬚を垂れて、瘠せた、憂鬱らしい老人が來た。續いて來たのは、二人の襤褸を纏つた若い女で、そのやつれた、蠟のやうに白い顏には、恐怖と當惑の表情があつた。それと一緒に、非常に高い、菊目石(あばた)の一杯な、眼の下に暗い輪のある、そして鈍い白色の、長い鬚をもつた百姓が立つて居る。彼は狂氣のやうな熱心で、神像の前に祈つて居たが、やがて、まるで、何かに腹を立てたやうに、その眉を蹙める。彼は明らかに喘息に惱んで居るので、時々、鈍い、空洞の咳をする。

『その恐ろしい病は、診て貰つて、療治をした方がいゝよ。』

彼の傍の、小さな、干乾びたやうな、弱り切つた顏をした婆さんが囁いた。

『そうすれば、屹度、些しは樂になるに違ひな、

よ。』

『いや、いや、わしにや解つてる……。』

彼は絶へ間の無い咳の發作の間に、嗄がれ聲で答へる。

『もう如何したつて、間には合はない。わたしは是れから、幾日も生きられはしまい。』

老人は、深く嘆息する。

凡て是等の飢餓の犧牲は、默つて、辛抱して、衝立の背後に往く自分の番を待つて居る。そして敎父ジョンの前に、彼の罪惡を認める。凡ては彼等が大なる罪人である事を信じ、その叛逆的な精神が、時々神の全能と『智慧と、惠みとに對する信仰を失ふ爲めに、深い悔恨を以て打たれて居るのである。凡ては彼等の、靈魂の救ひの苦痛と絶望との爲めに、苦がい涙を流した。凡ては彼等と同じやうに貧乏で無智で、同じやうに缺乏と零落とに捨て置かれて居る敎父ジョンから、力と慰さめとを求めて居る。彼は、然し、彼を支ふるのみならず、また彼の飾り無き言葉でその周圍の殉難者に、主の聖旨に對する服從と、慰藉を施すべき力を與ふる確乎とした、動かされざる信仰と、溫かい優しい心情とを持つて居る。彼は眞實の基督信者であるから、彼等に基督を話す事が出來、また救ひ主『死』を忍耐して待つやうに、彼等に敎ゆる事も出來る。

そして、薄れ往く日の弱い光の差入らぬ、古い幽暗な寺院の內では、今は殆んど見へ難い位な、此のボロボロの身も心も壓し潰された、飢えた人々の灰色の群を超えて、十字架の上に、その容貌に暗默の詰責の表情をもつて、その最後の眺めを天に向けて居る救世主の、血を流せる肖像がかゝつて居る。

間も無く、村や、杜や、野や、荒廢した會堂は陰暗たる夜に包まれる。涙と嘆息とは靜まり、そして凡て憂欝なる景色の上には、墳墓の安息と沈默とが支配し、一陣の烈風、待つやうな響きをもつて、荒れた濕野を急ぎ過ぎる時の外、滅多に破らるゝ事が無い。

II

壯麗な鹵簿が、皇帝に屬する宏大な宮殿の一の、階段の傍に立つて居る。無遠慮な馭者は、火のやうに早り狂ふ馬を、全力を盡して制し、立派な、營養のいゝ金色燦爛たる法被を著し、黑光りのする靴を穿き、そして、黑絹の長韈を着けた馬丁は、馬車の扉

を開かうとして駈け寄る。高い、肥つた僧正は、廣い垂れるやうな袖の、長い絹の長衫(カフタン)を着て、威儀堂々と馬車から立ち出で、馬丁に扶けられて、宮殿の奥深く消えてしまふ。

速い、静かな足取で、彼は長いカアペット敷の廊下を過ぎて、まるで小亭の一を思はせる、快い、小さな寺院に入つた。何處でも分光器に在る凡ての色彩の眩ゆい顯現、金頭の金剛石の妖艶な光耀、艶麗な繪畫、雪白の大理石、最大の瑠璃、それから、他の多くの寶玉の數々。

高貴なる美術品たる欄干の附いた高座には、唱歌隊が立つて居て、或は低聲で互に話し合ひ、或は中音の練習を試みて居る。僧正と同じやうに營養のいい、立派な二人(とも)の寺院の役人は、宮廷寺院の巨大な金製燭臺に、大きな蠟燭を點して居る。

會堂と宮廷の内部との間の、重い二重扉は、音も無く華美な軍服、即ち『屠殺の制服』を着て居る露西亞の皇帝(ツアリ)、凡ての飢えたる百姓の全能なる主權者の爲めに開かれる。彼の傍には、皇后(ツアリナ)が現はれる。兩陛下の背後には、また殺人の武器を横たへた親王殿下等が立ち出でる。續いては妃殿下、宮廷の高官、貴夫人、諸大臣、及び侍從等が引き從ふ。

その瞬間に、晩禱式は始まる。僧正が音樂的な聲で、感銘する吟誦調の初めの句を歌へば、熟練した唱歌隊は力ある聲で唱和する。四方八方から、人の注意は眩いやうな色彩の華飾、混和せる諧調、それに恍惚とする燻香の匂ひに因て、釘付けにされてしまふ。殺人の大禮服を着てもがいて居る男、金剛石で耀やく盛裝の列を作つて居る女は、辛と解る位に頭を傾むけて、その歸依を始め、優美に手を動かして十字の印しを畫く。皇后のみ、明らかな不器用、或は不馴れを顯はすが、是は必ずしも驚くに足りない。彼女は僅か數週前、地上最高の玉座に上るに欠くべからざる條件たる、希臘正教寺院に甫めて赴むいたのであるから。そして今、全能なる女主權者として、聖者の名の下に彼女の崇敬を受け、然もその宗教的意義は、彼女にとつては猶ほ封ぜられた秘密だが、金碧燦爛たる神像を拜する爲め、神秘な手付きの數々を眞似ながら此處に立つて居る。彼女は心で嫌惡し、自身とその周圍とに對する侮蔑をもたずして、凡て是等の愚劣な、偶像教染みた、不可思議な、そして迷信的な儀式に列しないでは居られなかつた。彼女はまたかゝる時に際しては、その良心と實に恐ろしい爭ひを覺ゆるのだつた。で、啻に彼女のみならず、彼女の傍の多くの背教者も、また彼女自身の加く、その心の平和、その靈魂、その自重をば、委く地上の權勢の爲めに賣つたのである。

皇帝の左、やゝ後面に、その墮落と、暗愚と、邪惡とで、歐羅巴全土に有名な、皇帝の叔父殿下が立つて居る

馴れた手付で、十字の印を畫きながら、彼の思ひはその若い時分から、飢えた數千の露西亞農夫の血と汗から絞り取つた黄金で裝つた、巴里の女優に飛んで往つて居る。そして今、彼は如何したら一刻も早く、洗練された罪惡の首都に於ける彼の『大公夫人』の許に歸れるかと思つた。で、彼は恰かも彼が、數人の『神の見捨て給へる惡漢』が、『主の傳油し給へる者』に對して、敢てその手を揚げた爲めに、敢て赤色の大旆を飜へして、彼得大帝の都を誹瀆せるが爲めに、神聖なる貴族と、皇帝の古き種族とに對して敢て叛逆を叫んだ爲めに、皇帝の會議に召し還された事を想ひ出して、限りも知らず憤怒した。

彼の傍には、若くして經驗無く、數世紀間、露國宮廷の情景の背後に行はれた、國民と個人の安寧にかゝはれる、殘忍な遊戲は些しも知らぬ皇后に對し、新たな、卑劣な隱謀を、胸の內で企らみつゝある親王夫婦が立つて居る。彼女は機械的に、左手の近頃丁年に達して、聖彼得堡中で一番美しい婦人の一人に對し、皇帝の特權を繼承した、若い美しい親王の敬虔な手付を眞似て居る。

勤務の僧正は、正教會の禮典に屬する、神秘な儀式や術を行ふに、何も急ぎなどは決してしないが、それでも式はやがて終つて皆な長い安堵の嘆息を泄らす。宮廷の美しい寺院內の、嚴肅な、崇嚴な沈默は、半ば聞き得らるゝ呟きで破られる。凡ての種類の挨拶は冗談交りで交され、高位の貴夫人等は、顏を赧くして微笑みつゝ、その隨伴者の面白い會釋を受ける。他の者が、兩陛下に倣つて、聖餐式に列し、そして、彼等の信心と忠義との、明らかな證しを示そうとして居る時、幾人かは人知れず、ソッと忍び出るのである。

數分の休息後、皇帝はその腰間の殺人的武器を除く事無く、祭壇に步み寄つて、自ら恭々しく十字を畫き、壇上に橫はれる社會主義者耶蘇の、金製の像に接吻する。宮廷と寺院との禮式に通じて居る、香を焚き占めた僧正は、急いで皇帝に近寄り、登壇の一方、彼と反對の右側に立つて、その懺悔を始むべき瞬間を待つ。

此のよく馴れた高僧は、狡猾で、博識で、達智で、常に奢侈、逸樂、怠惰に暮さんと欲して、その靈魂を賣つた。彼は數百萬の國民が飢饉と疫病とに亡び、露西亞の最も高貴なる子と娘とは、正義と自由とに對する戰ひの爲に、穢くろしい牢獄、或は凍野に惱み、武裝せざる男、女、子供等まで、日々泥醉せるコサックの爲に街路に於て鞭殺され、また神と人との法則に對し、彼の前に立てる男に因り、或は彼の名に因て犯されざる罪は、一つも無いといふ事を知つて居た。然し此の神の召使ひは、皇帝の懺悔中、彼に惱ましい記憶や回想を呼び起さすやうな事は、一切巧みに避けた程の、要愼深い、惡賢い男である。彼は右手で寬袍の下に、綺麗に髮を捲いた若き皇帝の頭を隱し、猫撫で聲で、意味ある恕しの言葉を語る。と、『主の傅油せる者』は、彼自身と全世界との間に全き調和を感じて起ち上り、そして再び、十字架上に死んだ革命黨を接吻する。

同じやうに巧妙な手段で、僧正は若い皇后の懺悔の番が廻つて來た時、その儀式を繰り返す。然もその間、彼はいま希臘正教の式典の命に從はんと努めて居る、此の當惑赧顏せる女が、若し平民であつたならば、現世の利益の爲めに父の宗教を棄てた罪で、露國法律の下に無慈悲に宣告され、終身西比利亞へ流さるべきである。そして全能なる宗務院長は、曾てズハボア(非國教徒)の妻、姉、妹、娘等に對して數限り無く行つたやうに、此の女をも、コザックと憲兵とに與へるに違ひないと思ふのを禁じ得なかつた。

III

翌日、起きるなり、皇帝は彼の奴隸の最高官たる總理大臣が、前夜熟睡中に暗殺せられた悲報に接した。彼は恐怖の餘り、その信賴する慰撫者たり、忠告者たり、友人たる、全能にして畏憚されて居る宗務院長の腕に、吾れと吾が身を投げた。帝の命令を待たず直ちに冬宮に馳せ付けた後者は、犯人が既に捕へられ、そして陛下の名に因て、死罪を宣告された吉報をば告げて、愛す

る主を慰さめ靜めた。

若き皇帝は、默した、嘉賞した手付で、宗務院長の伏奏を受け納れた。顔を手に埋めた儘、彼は永い間默つて動かずに座り、空しく此の新しい呪咀を考へた。此の次、誰が犧牲に上げられるだらう?。彼は空しく、その不安を靜めんと努めた。そして深い嘆息をして、故人の爲めに鎭魂歌を、宮廷寺院で歌ふべき事を命じた。そして兩陛下は再び、聖餐式を受くる爲め其處に赴むいた。

嚴肅な儀式は始まつた。助祭は唱歌隊に伴はれて、祭壇の閉ぢた扉の前で、大聲に燃ゆるやうな、殘酷は祈禱を吟誦する。『復讐し給ふ正義の神、此の世と永遠との罰を以て、地獄より送られたる殺害者。又は皇帝に、母國に、及び神聖なる貴族に、公けに或は秘かに惡意を有する、凡て他の者を訪ひ給へ。』そして皆、十字架上の最後にして、また最も苦しかつた刹那、猶且つ敵の爲めに祈れる人の面前に、此の殘忍醜惡なる言葉を、敢て語るのである。

増れる情熱を以て、祭司は皇帝、皇后、その子供、兩親、兄弟姉妹、及び遠い親戚。また宗務院、銃劍、大砲、軍人、及びコザツクの鞭。また晴天、豊作。また芬蘭人、ポウランド人、猶太人土耳古人、支那人、學生、勞働者等を除いて、地上一切の住民の平和と祝福とに對して、お定りの祈禱を吟誦した。その間、彼の召使ひにして從順なる器具の、恐ろしい最近の暗殺からその考へを放す事の出來なかつた皇帝は、深い歸依を以て祭司の言葉に從ひ、十字を畫き、低頭し、跪づいて、禮拜式の凡ての敎訓を行はうとするやうな風を裝ふ。

儀式は半ば終つた。助祭の聲は靜まり、唱歌隊は嚴そかな高音を吟誦し、祭壇の扉は開かれて兩陛下は最古最高の家族より選ばれた小姓を從へて、階段を上ると、金色の長袍を着し、香り高き酒を盛つた紅玉を鏤めた聖杯を持つて、大敎正が待ち設けて居る。

低い、然し、聞へる言葉で、僧正補は既成の形式を指圖する。『罪人を救ふべく、此の世に來れ……。』皇帝は、尊ぶべき大敎正のさゝぐる金の聖杯の方に、その頭を垂れた。

『その人の間に、吾れは最も大なる者なり。』僧正の墓のやうな聲が吟誦する。

『その人の間に、吾れは最も大なる者なり。』皇帝は毫もこういふ意味ある言葉に感動した樣子も無く、呆然として『平民の煽動者』の血と肉との、彼の分量を嚥下しながら繰り返す。

『その人の間に、吾れは最も大なる者なり。』次に皇后は、機械的に、そして不確かな聲で、繰り返した。彼女の心は、最近の恐ろしい殺人の爲めに、まるで引つ繰り返るやうであつた。昨日、その犧牲となつた現世の權力者の一人、羨望の的となり、權勢の表象だつた寵臣は、今日全國の呪咀に伴はれて、永遠に墓の中に隱されて了つたのである。彼女は命令で塗り潰され、今日は彼女のいと微かな點頭にも從ふと雖も、恐らくは明日、その臆病の爲に、復讐と、憎惡と、返報との遁れたる惡魔の手に、彼女及び凡て彼女が愛する者を渡さぬとも限らぬ、周りの凡ての勇ましい奴隷をば、戰慄して眺めない譯に往かなかつた。

と、彼女は恐怖の爲めに、魂まで凍つて了つた。皇帝は紅に染つて、彼女の傍で打ち倒れたのだ。が、聖者に榮光あれ!それは只だ、彼女の苦患と紊れた幻想との惹起した錯覺が、皇帝の華麗な制服の襟の深紅色を、血と見誤らした結果に過ぎなかつた。彼女が大敎正の手から麵麭と葡萄酒とを受けんとして低頭した時、

まだ眞實に氣を取直しては居なかつた。主教の鋭い好色の眼に曝されて居る、彼女の露はな動悸打つ胸に、その頸、頭、豊よかな腕に算へきれぬ金剛石と眞珠とが輝やいて居る。然もそれ等は、彼女の夫やその大臣が、日々刻々、數限り無き露西亞人の女や、妻や、子供等から强徵する涙に比すれば、何といふ不純、何といふ無價値であらう。

兩陛下は聖餐を受けた後、階段を降つて殺虐的に着飾つた男と盛裝した婦人との、長い輝く列の間を通つて往く。と、彼等もまた順々に、輕蔑された、氣狂ひ染みた、平和の宣傳者の血に因てその罪から淨めらるゝのであつた。

かうして、その廷臣の慶賀を受けた後、皇帝は自室に入つて、待つて居た宗務院長、諸大臣、並びに巴里の娼婦間の古强者たる叔父殿下と共に、『社會安寧の敵』に對して、國家を防衞するには更に如何なる武斷政治、壓制手段を執られればならぬかを論ずる。そして異口同音に、更に數億ルーブルを支出して、磔殺された彼等の先進の如く、自由と、光明と、眞理とに對して、その血を與へた殉道者の數を增すべき事を決議した。

皇帝は起ち上つて、優美な手付で、顧問官や信任せる召使ひに退出を命じた。と、彼等は塵の中に平伏して、多數人類の生命と幸福とを無視せる、兇惡なる獻言をしたのを自ら羞ぢもせれば、良心に些しの苛責も感じた風は無く退出する。てふど今、救世主の血の中に、彼等の罪の免しを求め、そして恐らくは見出したるべき彼等は、すぐ又、君主の點頭に從つて、社會の平和に反して、正義と自由とに反して新しい陰謀を企て、神の律法と基督の敎訓とに反して、新らしき罪惡をたくらむのである。

IV

翌日、忠君愛國的の新聞は、『英聖文武、全露國民の尊崇する兩陛下は、諸大臣及び有司百官を從へ、冬宮内の宮廷寺院に於て聖餐を受けさせられ且つ是れに依て、敬神、溫順、並びに他の基督敎道德の新實例、及び有ゆる時代に於て、神聖露西亞の永遠の名譽と、眞の幸福とに對する保證たりし、唯一救靈の希臘正敎寺院に對する歸依、忠誠の新證を、その忠良なる臣民に示し給へる』大なる歡喜の報導を掲げた。（完）

權力

サムエル・バトラア

權力は醉はせ、只の愚物を奉行にする。
その臭ひは腦を冒し、人を、眩めかせ、
誇らせ、意張らせる。
こうして、愚人が賢者に命令する。
高貴を下劣と一緒にし、
阿呆が智者を支配し、
また卑怯者は勇者を屈服させる。

人間屠殺所

ラムスヾス作
佐藤緑葉譯

九　天地旋動

行進の中途、誰かゞ私の傍で仆れた。彼はその腕を投げ出して、しつかりと地に這ひ付いた。そしてきい〳〵言つて、地に向つて喘いだ。それから僅か半時間の後に、吾々は又痙攣を起して仆れる男を見た。吾々が濕つた溝の中で敵を待つてゐる時に、ひとりの男が突然躍りあがつた。そして絶叫して、駈け出した。彼は遠くから吾々に向つて笑つて、とう〳〵雨の中へ眼界から消えて了つた。絶叫と遁走とが吾々の全体へ傳染した。やがて自分の番になるのも遠い事ではないだらうと思はれた。

ある夜、吾々は塹壕に横はつて、大砲の轟きをきゝながら眠つてゐた。その時私は突然立ち上つた――頭は亂れて――眼は眩いて。併し見よ。星は暗い晴れた空に輝いて、壯嚴に下界を照してゐる。噫！何といふ壯嚴さだらう、此騷亂の時に際して、恰もこの世に何も無いやうである。併しそこに――私の前方に私の此眼の前に――紅い反射光線がきらめいた――それは確かに血の渦卷に相違ない。星は眞紅に其色を寫した――突然盲目的な怒が私を捕へた。私は高聲で絶叫し、そして自分の拳を握りしめた。そして吾々の上にゐます大いなる神の顔をどなりつけようとした――併し私は叫ぶ時も、走る時も持たなかつた。此同じ夜、物凄い唸り聲が、遠方から吾々の耳に落ちたのであつた。それはプロペラーを持つて吾々の方へ飛んでくる『死』であつた。夜の化物は吾々の上にヒユッと唸つた。吾々は盲目滅法に空中へ發砲した――一瞬間毎に暴風雨が吾々の上に爆發した……水雷管が吾々の上にあつた……・それは一分間に噴出する事が出來た……彼等はダイナマイトを撒き散らした……ついでマグネシウム爆彈を發射した……叫喚と粉碎とが吾々の見てゐるそこゝに起つた……ついで又それが繰返された……やがて吾々は其塹壕を退いた……そして無感覺になつて、自動人形のやうに、吾々

一日行進した。私は自分の皮膚が鳥肌になるのを覺えた。私の神經は痛んだ。私の背中の銃劍が小さくなかつたなら、私は銃を投げ出して、濕つた砂の上に這ひ倒れたであらう。

併も四日の後には、彼等は再び吾々に元氣を甦らせてくれた。吾々の後方、河の他岸に吾々の聯隊は越えて行つた。そして新らしい地點を索した。吾々は如何なる價を拂つても彼等の通路を閉鎖せねばならなかつた。

吾々は今や最後の豫備隊に近づいた。吾々は尙ほ手にスペードを持つて立つてゐた。そして痛む腰と腕とで、土をすくつては投げ出した。其時吾々の前方灰色の夕暮の光の中に、吾々は行つたり來たりする人の影を見た。彼等は忙がしく土を掘つて、何かしら吾々に見る事の出來ない穴の中に置いた。そして再びそれを被ふた。彼等は音もなく其仕事を行つた——極めて注意して是を運び、十分に防禦の用意をして動いた——彼等が再び返つて來て、吾々の前を通つて進んで行つたときには、彼等の顏は生々として、其唇は默つてゐた。彼等は第一流の職である事を證明した。彼等は立派な仕事をしたのもある。彼等は地の底に坑道を造つた。そして其中に爆發藥を裝置した。若しも敵が今夜來たならば、先日彼等が空から吾々に見舞つた贈物を、吾々は利子つけて敵に支拂ふであらう。彼等はそれを全く鼠落しのやうに仕懸けたのである。其地雷火の向ふには、二中隊の兵が命令によつて伏してゐるのである。そして其中間の野原には、味方の砲兵中隊が掩堡なしに立つてゐるのである。それは恰も敵の手に渡されるべき運命を持つてゐるやうに其處に植えられてゐる。

扨、吾々は長い塹壕の中に横つてゐた。折々野に眼をやつて、そこに輪廓をつけてゐる大砲のシルエットをじつと見つめてゐた。太陽は餘程前に沈んで了つた。

遙か彼方から、小銃の微かな響が、はつきり吾々の耳に達した。

若しも其音がもつと長くつゞいてゐたならどうだつたらう？。

吾々の命令は直ぐ下るばかりになつてゐるのである。

吾々は外套をつけた。夜は冷たくて、氣溫は低

かつた。私は死の野を眺めやつた――もしもざつと眼を通すなら――そこには何等異る物を見る事は出來なかつた。

一人の斥候兵が歸つて來て、報告を小聲で囁いた。

吾々は、射擊の命令が下るまでは發砲してはならぬといふ訓示を受けた。そして――命令が下つたならば、空に向つて發砲する事になつてゐる。

遙か地平線の彼方の背景には、土地が高まつてゐて、灰色の大空の線が、曇つた空に向つて立つてゐた。小銃の射擊は一分一分と烈しくなつた。そして脅すやうな響が增して來た。左翼及び右翼に當つて戰鬪が烈しくなつてきた。吾々の前方には地雷火の野が沈默して橫はり、又二中隊の兵が銃坑によつて靜かに伏してゐた。

私は自分が恐ろしく草臥れてゐる事に氣が付いた――私はもう自分の足で立つてゐる事が出來なかつた――私の頭は銃の上に沈んで行つた――私の眼は閉ぢた――併し緊張した神經は尙ほ眼をさましてゐた。

やがて――

大地が物凄く震動した。

それは味方の砲兵隊であつた！　彼等は闇の中へ眞直に發砲したのである。で、今度は吾々の番となつた。

吾々は如何に『味方』が射擊を開始したかを知つた。そして突然それが烈しくなり、死者が出來、更に氣狂ひのやうな轟が烈しくなつた事を知つた。それは勇氣滿々たる狙擊兵の攻擊である……

…彼等はもう餘り遠い處にゐるのではない………併も砲兵隊は吼えつゞけて、敵の襲擊して來る事を誘ふた………。

やがて進軍の曲が暗い裡から起つた………喇叭が闇を透して響き、太鼓が物凄く鳴り渡つた……總攻擊のしるしであつた………叫び聲と足音とが轟き起つた……… 雷鳴のやうな勝利の叫び聲が闇の空に鳴つた………それは一千の咽喉から出た勝利の叫び聲である………彼等數千の者は『吾々』の上に突擊し來り、そして彼等（そこにゐる味方）を粉碎した………は、は！　彼等は襲擊によつて吾が一砲列を奪つた………。

突然、靜まり返つた………何の目的だらう……

今こそ吾々の番である……。

「空中に！急射！」

一齊射擊が行はれた。見よ……彼方から再び叫び聲が起つた……攻擊の相圖が響き渡り、數千の聲が一齊に絶叫した……彼等は沸き立つた……彼等は勝利の念に滿ち〳〵て、密集隊となつて突擊して來た……彼等は叫びながら地雷火の上を突進した……彼等は恰も馬蹄にかけるが如くに地を踏んだ……それは『死』を意味してゐる…。私は堅くなつて横つてゐた……もう爆發しなければならぬ、今……。私は口を廣くあけた……私の銃は私の手の中で顫えてゐる……。

其時——

大地はその口を開いた……閃電、爆發、雷鳴、天は二つに裂け、焔となつて落ち——地は高く粉々になつて舞ひ上つた……人間と土地とは空中で廻轉花火のやうに光を放つて旋つた……そして……悲鳴と絶叫とが吾々の胸を撲つた。で、吾々はよろ〳〵と後方によろめき、半ば意識して砂塵を呼吸した……やがて……暴風が過ぎた……大氣の壓力は吾々の胸を和げた……吾々は深く溜息をついた……たゞちり〴〵である。折々爆竹が踊り……花火が……。

併し地上には何が起つたのだ？——

吾々は地雷の跡を恐る〳〵熟視した。

眞紅な地獄が口をあいたのか？

そこに叫び聲、泣き聲が起つた。非常に不自然な野性的な、無制限な絶叫である。それをきいて吾々はお互にじつとしがみ付いた……そして震へながら、吾々は吾々の顏を見た。吾々の軍服は紅く濕つた物に染められ、上衣には明かに肉の裂片を認める事が出來た。吾々の足の間に何物か横つてゐた。前には何物も無かつた處に——それは闇の中に白くきらめいてゐる。伸ばした……妙な恰好の切りとられた手である……そこにもこゝにも……まだ軍服の引つ付いてゐる肉片がある——吾々はそれを確かめた。恐れが吾々をとらへた。

ずつと向ふには、腕や、足や、頭や、胴体などが横つてゐた……彼等は闇の中で呻いてゐる。全聯隊はそこで粉碎せられて、ヒユマニテイーの一團は天に向つて泣いてゐるのである……。

雲が地から立ち騰つた……彼等は聲高く泣き

ながら空中に騰つて行く。彼等は濃い一陣の風となつて吾々の上を過ぎて行く。それ故吾々は傷の蒸發して行くのを見る事が出來た。又血と骨とを吾々の舌に味ふ事が出來た………。

其時不思議な幻が私の眼の前にあらはれた………。私は紅い『死』が、彼方の野に立つてゐるのを見た………雲はシンフォニーにつれて、齒をむき出しておりてくる顏をあらはした………突然其闇黒の中からはつきりした音樂がきこえた――有項天になつて『死』が、其提琴の裂けるまで弄んでゐる音樂である………こゝへ來るのは、走つてゐるのは人間なのか。………彼は突進してくる……彼は吾々の背に飛び上るだらう………止れ… 止れ… 止れ彼は眞直に塹壕の中に躓き倒れた。そして引つくり返つて、咽び泣きながら、吾々の銃の間で呻いてゐる。彼は其手と足とで吾々を打つ………子供のやうに號泣し、苦悶してゐる。併も誰も彼をつまみ出さうとしない………そこで今度は膝で立ち上つた………それを吾々は眺めた… 彼の顏は半分破りとられて了つた………一方の眼は無くなつてゐた………ピク〳〵と動く膝の筋肉はらぶさがつてゐる………彼は膝まづいた。そして手を開いて、又閉ぢて、吾々に慈悲を乞ふために呻いた。

吾々は恐れに撲たれて彼を見つめた。そして痲痺して了つた。其時例の田舍者が――それを見て吾々の眼は彼に感謝した――銃の臺尻を振り上げて、銃口を顳顬の反對に向けて立ち上つた……………バング！……不具の負傷者は後ろに倒れて、併も眞紅になつて橫はつた………。

闇は又怪しい形を投げ出した………彼等は駈け出して、醉つぱらいのやうによろめき動いた………彼等は倒れて、やがて又新に起き上つた………彼等は闇の中をザク〳〵と競爭して、とう〳〵疲れて引つくりかへる迄走つた。そして吾々の眼の前に橫たはつて、其終をつげた………。

やがて又誰かゞ吾々に向つて這つて來た。彼は四つの手足を用ひて這つて來た………何物かがその身體の後ろに曳いて、絕えずクウクウと泣きながら、長く尾を引いた調子で顫え聲に咆えてゐた………彼は次第に疾く這ひ進んだ――そして吾々の處へ屆いた時には、吾々は――血が尙ほ吾々の心にくつ付いてゐる事を知つた――彼の身體にはその內臟が引つ懸つてゐた………彼の腹は下方から引き裂かれてあつた………彼は這つた、內臟が來た………恐ろしさが總ての毛孔から飛び出した………辛ふじて彼は吾々の三步前に橫はつた………そして………援けたまへ………彼奴は手をついたまゝ徐かに立ちあがつた………一瞬間その儘でゐた…そして見廻した………南無三………彼奴は私を見た。そして再び私の眼の行く事を拒んだ……… 私は其大きな、死相をあらはした眼より外には何物をも見る事が出來なかつた………南無三………彼奴の眼は、其眼は！其物も言はずに私を見降してゐる眼は、或る母親の眼であつた………吾々の前に屠られて橫はつてゐるのはその母親の息子である………私はそこへ駈け寄らう………私自身彼に身を投げかけて、咽び泣いて、その額に接吻して、私の淚で彼の苦痛を洗ひ去つてやらう………が、私は私の頑な緊張から動く事が出來ない………やがて恐ろしい緊張が和げられた――彼の腕が緩めた………彼は前方に仆れて、その傷いた身体の上に沈ん

だ。手は更に一度突っ張つた……が其儘じつと橫つて、母たる地に、其子を恐ろしくも殺して了つた地に、接吻した……。

私は草臥れた……私の手は顫えてゐる。……其時全く突然、吾々の後ろから歌ひ出した者がある……壯重に――長く引いて。……『今や吾等みな神に謝す……』歌つてゐるのは狂人である……。吾々の總ては狂氣の次の扉にゐるのである……。私はあたりを見廻した。そして灰色の歪んだ顏と、火のやうな、びつくりした瞳とを見た……。突然歌つてゐる聲は、高いぶしつけな笑に變つた……。

「は！　は！　は！　は！」

其笑ひ聲は恐れに滿ちて、彼方の死に行く呻き聲とごつちやになつた。笑ひ聲は次第に高く、次第に亂暴になつた。そして地にまき亂らされた憐れな死者に向つて、平氣でずうずうしく笑つた。

「鼓手！　大鼓を打て！」と、さつきの聲が叫んだ。

「祈禱するから脫帽！」

吾々は其男を認めた。彼は或る信心深い教區に屬する豫備兵である。軍曹が彼をつかまへて引き据えようとした……大尉が駈けつけた。けれども狂人は引きはづして、前方の銃坑の處へ駈けて行つた……彼は眞直に立ち上つた。黑い、粗野なシルエットが、蒼褪めた夜の空に描き出された。彼はその手を擴げて、病める夜に祝福を與へた……彼はそこに恍惚たる牧師のやうに立つて、夢中になつて、きれぎれになつた闇に祝福を與へた。『父の御名により、子の御名により、そして神聖なる靈の御名により。』

其時幾つかの手が後ろから彼を捕へて引きおろした……彼等は彼を地に引き据えた……『吾等の父』と彼は聲高く叫んだ。そして周圍の者を打つたり、蹴たりした。祈りは其怒れる身体から出で、遂に呼吸が出來なくなるまでつゞいた……彼等は其男の手と足とを縛つて、猿轡を嵌めた……

すると今度はあり得べからざる事が起つた――それは少くも起るべき事ではなかつた。

其聲がきこえた時に、私は曾て其聲と一緒にゐたことがあるやうに思つた……。

「大尉殿！」亂暴な、むきだしな、たしなみの無い、誰も皆知つてる聲が叫んだ。「大尉殿は吾々の耳に栓をする綿をお持ちぢやありませんか？」

吾々は其命令するやうな聲をきいて皆振りかへつた。それは民兵の例の田舍者である。彼は大尉の面前に立つて、身ぶりをして話してゐた。「私はたゞ、あなたのずたずたにした奴等が、けだ物なのか、それとも人間なのか、それがきゝたいのです。」

すると、短い、鋭い、吾々のよく知つてゐる、いらだゝしい命令の調子が答へた。

「貴樣はどうしたといふのだ？　しつかりしろ。きこえないのか？　直ぐ貴樣の位置に歸れ。」

すると、『自然』の聲が叫び出した。その聲は非常に鋭くて、あらゆる防壁を引き裂いた。

「人殺し！」瀆神者の口が叫んだ。「人殺し！　俺達はそいつの頸を犬のやうに打んなぐつてやらう。」

吾々は悉く電氣に打たれたやうに立ち上つた……それは吾等全体の舌の尖にある言葉であつた……それは來るときまつてゐたクライマツクスであつた……吾々はもう此納骨堂の中に坐つ

てゐるのを我慢する事は出來なかつた………。

「貴樣は何だ、氣をつけろ。」

他の激した聲が今一度響いた………その時吾々は確かに大尉の馬鹿であるといふ事を知つた………彼は最初から此ゲームに負けてゐた………今では………それは私の眼の前に踊つてゐる………影のやうである………怪しい活動寫眞のやうである。………私は田舍者が銃劍を引き拔いたのを見た………大尉はそれに向つて短銃を手にして、其田舍者に命令を下した………彼は銃の臺尻で、すばやく大尉の頭に打擊を與へた。それが爲に大尉は一言も出さず地に仆れた………すると彼等はあらゆる塹壕から跳り出した………「人殺し！」彼等は叫んだ。「人殺し！　奴等を殺せ！」

もうそれを留める事は出來なかつた………私は自分が氣狂になるやうに感じた………私は自分が何處にゐるのか知らない………私はあたりに滿ちてゐる野獸どもが、不自然な生死を堵した摑みあひをしてゐるのを見た………血走つた眼をして、泡を嚙んで、齒ぎしりをして、彼等はお互に攻擊し合ひ、殺しあひ、引き裂きあふた………。私は跳びあがつた………私は逃げ出して、こゝから遁れなければならぬ。でなければ、やがて私も之等の狂人の死の運命を有するモッブの中に引き込まれるだらう。………私は銃抗に躓いて倒れた………私は闇の中へ駈け出して、ふるへてゐる肉を踏んだ………堅い頭を踏み、武器や軍帽に躓いた…何かしら手のやうな物が足の下でまがつた。それ故私は踵に獵犬の追ひ及んでゐる狩り出された鹿のやうに走り出した………死体は益々ふへた——呼吸の無い者が——こちらの野から向ふの野へ……恐れが私の頭に呻き………恐れが私の足に呻き迫つた………死んだ、引き裂かれた肉以外には何物も無い………。

地は悉く爆發して了つたのか………今夜は死人以外にも何も無いのか………總ての人間が一度に殺されて了つたのか………。

私はどれ程長く走つたらう………私は自分の肺がせい〳〵鳴るのをきいた………また私の顳顬がドキドキいふのをきいた……呼吸がとまつた………私は草臥れて了つた………私は後ろへよろめいた………死んで地に倒れた………否私は何かし

ら軟らかい物の上に背を沈めた。そしてじつと靜かに座つて一心に夜の聲に耳を傾けた……私は自分の耳に鳴る血より外には何もきく事が出來なかつた……其時全く突然、私の眼に輝かしい、はつきりした日光のやうな光が見えた……太陽が輝いた……が、やがて私は自分の頭のせいであると知つた……幻影は私の頭の中で孕まれ、頭の中から生れ出でゝ、倦まずに人の踵にくつ付いて來たのである……私は聯隊が進み出すのを見た……彼等は輝く日光の中を行進した……青い服は向ふから、紅い服はこちらから、彼等はお互に相對して長い列をなして行進した……やがて彼等は立留つた。お互にすぐ眼の前に向きあつて近よつてゐた……闘ふ用意をして……其時吾々の大尉の聲が、味方の側で響いた……『用意？』……兩方の銃があげられた。私は黒い銃口の夥しい數を見た……彼等は僅に十歩を隔てゐた……彼等は胸に眞直に狙つてゐた……『留れ！』私は叫ばうとした、『留れ！　お前達は七歩を隔てゝ攻撃しあはうとしてゐるのだ』……

其時再び大尉の聲がきこえた。『打て！』……一齊射撃が行はれた。見よ！　一人も打たれた者は無い……彼等は皆傷つかずに立つゐてる……空中に發砲したのだ……そして喜び叫んで列を解いて了つた……彼等はお互に馳けよつた……銃は地にまろび落ちた……併し彼等は相手の腕にかけよつて、お互に愛撫して、子供の笑ふやうに聲高く笑つた……それから彼等は自分の列に歸つた……銃を肩にした……廻れ右前へ進め……樂隊は愉快なマーチを奏し初めた。彼等は樂隊につれて行進した――各聯隊がそれ〴〵自分の兵營へ……。

やがて私は、自分自身其樂隊につれて歌ひ出した……私は右の手でタイムを打つて、左の手で自分の席を支へてゐた……其時何かしら私の手に妙な物がしたゝつた――温い水のやうな物が……私は手を眼の前へ持つて來た　……それは紅くて、濕つてゐた……私はすぐそれを知つた。私の下の白い物は砂の丘ではなかつた……私は死体の上に座つてゐたのである……びつくりして、私は馳け出した……そこにも亦一つ横はつてゐた……そこにも、又そこにも！……兩

無三！　私ははつきり見た。今夜は死体ばかりである……人類は此の夜死につくした……私は最後の生存者である……野は死んだ――森も死んだ――村も死んだ――町も死んだ――地球も死んだ――地球は今夜屠られて了つた。そして私だけが、たつた一人私だけが屠殺所を遁れたのだ。

此事は非常に重大な事のやうに私には思はれた。非常に悲愴なやうに思はれた――今や私は自分の運命がどうであるかを知つてゐる――陰氣な心持になつて、私は自分自身の行動を見守つた。そして如何に私がそれを仕了せるかを待つた――私は自分が靜かに手をポケットに入れるのに氣がついた。私は家を出る前にピストルを持つて來た。私は其玩具を手に取りあげた――鋼鐵は私を見あげて、眼を瞬いた――私は微笑みながら其黑い頼みにする銃口を見つめてゐた――私はそれを私の顳顬に當てた――私は引金を引いた。そして死んだ地上の最後の人間は――後ろの方へ引つくり返つた。

一〇　哀れな死人

彼等は吾々の暖い呼吸を土で被うて了つた。なぜ君はそんな爛れた眼をして私を見つめるのだ、兄弟！　君は嬉しくはないのか、彼等は吾々の樂しい死を嫉みはしないではないか？　彼等は吾々を繪のやうな畦の中に置いて呉れた。人間の身体に觸れうやとするには、たゞふり返りさへすればよいのだ。若し君の黄色い瞳を轉ずれば、君は微光の中に人間の死体ばかり見る事が出來る。一人は他の側に、彼等は相並んで眠つてゐる。死体の上には死体が積み重なつて、長く馬鈴薯畑の軟い砂の中に横つてゐる。吾々は其根の隣りの土地にさへも充滿してゐる。

太陽はまだ吾々の上に輝いて、上つてゐるのだらうか？――吾々が昔やつてゐたやうに、彼等は今でも町で笑ひ樂しむ事を知つてるだらうか？妻はまだ其死んだ夫を覺えてゐるだらうか――私の二人の子供は――彼等はもう其父親を忘れて了つたらうか？　彼等はまだあの時は極めて小さかつた――だから外の男が來たかも知れない――彼

等は外の男を父と呼ぶ事が出來る——さうだ、私の妻はまだごく若くて奇麗だつた。

　吾等哀れなる死んだ英雄よ！　最早吾等の最後の眠りを亂すな。吾々は故國の困難に殉したのである。吾々は今や勝利を得た。土地と名譽とを得た。吾々の同胞數百萬に十分なる土地を得た。吾々の妻は土地を得た。吾等の子供、母、父などは土地を得た。今や吾々の哀れな故國は呼吸すべき空氣を得た。最早窒息する心配は無い。彼等は吾々の空氣を淸くした。彼等は餘りに多いといふので吾々を追ひ拂つたのだ。吾々は最早他の口から麵麭を奪つて食ふ樣な事はしない。吾々は十分に食つて、十分に滿足して、靜かである。併し彼等は土地を得た！　肥沃な土地！　鑛山！　鐵鑛！金鑛！　香料と麵麭！

　來れ、哲學者よ。吾々の顏を世界に轉せしめよ。吾々をして月桂冠の上に眠らしめよ。而て吾が國の將來のみを夢みせしめよ。（おはり）

新刊紹介

■理想の人物（遠藤亙吉著）

著者文學博士遠藤亙吉先生は、流石に當代の碩學鴻儒だけあつて、本書の如きは單に一篇の修養錄に過ぎぬが、然もその議論の深遠高邁、到底吾々靑二才には齒が立たない。假へは、「國家主義と世界主義」と題せる一文の中に、「國家主義は各人の取らなければならない主義である……人間の生存が世界の利益を蒙つて居る事は今更云ふ迄も無い、世界主義亦必要である。國家主義と世界主義と孰れか吾人にとつて直接であるかと云へば、勿論國家主義である。世界の利益と國家の利益と衝突する場合には、國家の方を擇ぶのが即ち國家主義たる所以だ。」と論ぜる如き、筆を捨て只々その識見に感服するの外は無い。而してその文章に至つては、いかにもよく議論と釣合つて、讀者をして覺へず魂を邯鄲裡に飛ばさしむるものがある。（金一圓二十錢麴町區平河町五金尾文淵堂）

■愛の詩（大谷桃花著）

隔月刊行の詩集、本篇はその第一輯であつて、『悅樂の憂愁』以下六章の長詩を收めて居る。裝釘瀟洒、永續を祈る。（金十錢奈良縣高田町一四三愛の詩社）

社告

本誌前號を以て、『近代思想』も第二卷第六號、即ちてうど一年有半に達したわけであります。それと同時に、半年分、若くば一年分の購讀料が、てうど前金切となるので、そういふ向へは、例に依て購讀料拂込請求の端書を出しました。

處が、すぐ拂ひ込んで下さつた分は、僅か十分の一にも足りず、中には何の御返事も無い向もあり、爲めに本誌の經濟上に、尠からぬ困難を生じて居ります。本誌の經濟が何時も困難を極め、却々維持に骨の折れる事は、改めて申す迄も無く、讀者諸君のとうに御承知の事と存じます。どうか其邊の事情を御諒察の上、至急購讀料を御沸ひ込み下さるか、若くは、何時まで待てとかいふ御通知をいたゞきたく存じます。

猶、本誌の擴張の爲め、新しい讀者の御勸誘を願ひたうございます。それには、御知己の住所姓名を御通知下さいますれば、本誌の見本を郵送いたしますし、別に勸誘狀を御添え下されば、一層結構でございます。

寄贈雜誌

創造　自畫像　第三帝國　生活と藝術
エゴ　帝國文學　新公論　へちまの花
青鞜　新佛教　眞人道　實業之世界
新潮　ウォールド　塔　人生と表現
民聲　新眞婦人　番紅花　ダイヤモンド
假面　現代詩文　關西藝術　ナショナル
創作　婦人評論　英語青年　早稻田文學
黎明　文章世界　公友新報　內外教育評論
銀磐　東京評論　村落通信　東京魁新聞
學鐙　郷土　新思潮　鑛業及鑛夫
獨立評論　支那と日本　名古屋經濟雜誌
日本婦女新聞　日本エスペラント

三月號目次

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵稅を要す。
■郵劵代用は五厘切手に限る。但し一割増の事。
■廣告料特別一頁十五圓、普通十圓。
■本社振替貯金番號東京一七一六三。

大正三年三月三十日印刷納本
大正三年四月一日發行

府下大久保百人町三五二
近代思想社內
編輯兼發行人　大杉榮

府下大久保百人町三五二
印刷人　荒畑勝三

京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　福音印刷合資會社東京支店

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

近代思想記者 荒畑寒村氏譯 （既刊！）

ショウ警句集

バナアド・ショウと云へばすぐ皮肉を聯想し、警句を聯想します。そのショウの著作の中から辛辣痛切なる警句のみを抽いて成したもの即ち、此の『ショウ警句集』であります。本書の著者は、ショウ嫌ひを公言して居る人ですが、それだのに態々本書を譯したのでも、此の書の價値は知れるでせう。附錄として安成貞雄氏譯ショウの演說『家婦所得稅論』及び『G・B・Sの人物』の二篇があります。ショウの好な人にも、嫌ひな人にも、一讀を薦めます。

四六判洋裝美本
定價金五十五錢
郵稅金　六　錢
ショウ寫眞挿入

ウエデキント作
逢田空穗氏序
深澤白人氏譯

犠牲の女

附 肉の愛 作者評傳

新式歐風横組
袖珍洋裝美本
定價三十五錢
郵稅金　四　錢

横文邦譯文藝 第一篇 既刊

獨乙文壇の明星で近時性慾問題の作家として、はた性慾敎育論者として盛名あるウエデキント氏が傑作で、性慾の犠牲となれる可憐なる少女の告白を叙し、完全なる肉慾滿足は人をして一歩神に近づかしむと云ふ戀愛の神聖を寓意せるものなり。牛獸人の文士どまで嘲罵の聲をあびせられし彼の傳奇は附して本書にあり。敢て江湖の愛讀を乞ふ。

東京市神田區南神保町十五
泰平館書店
振替貯金東京二四八五九番

月刊

へちまの花

第三號

主筆 堺利彦

賣文社發行
東京京橋區佐柄木町三
電話新橋二八五七
振替東京二四六二六

□一部メツメ三錢、一年分三十錢（送料共）
□モザ／＼する程の金額にあらず
□執筆者の爲めには買はずとも讀め
□販賣者の爲めには讀まずとも買へ

大畑匡山先生著　西村醉夢先生補

現代文藝新語辭典

現代文運の隆盛に伴ひ外國文藝の紹介せらるゝもの日に多きを加へ従て幾多の新語と原語とは使用せられ讀者其意義を知るに苦むもの尠からず。　著者**大畑匡山**氏之を憂ひ三年來單行書に雜誌に新聞紙に沒頭し苟も文藝に關係ある熟語は勿論新語乃至外國語等約**一萬有餘**を捜蒐網羅し之に關係ある原語を添へ簡潔なる解説を施し、**西村醉夢**氏懇切に修補して爰に整然たる本書をなせり。**語數豐富、訳述的確、現代文藝界の主要語は此一巻に盡く**といふべし。

内容——本書所載の語句は文學及び演劇・繪畫・彫刻等の藝術に關するものは勿論、其他哲學・心理・倫理・宗教・教育・美學・歴史・言語・神話等の各學科に亙れるを以て一面には**常識辭典**として、又日常多く使用せらるゝ外國語を蒐め之に解釋を施したるを以て**他面**に於ては**常用外國語辭典**としての要求に應ずるを得べし

洋装新形袖珍
布美紙金字入
装幀高雅美本
六號二段密行
定價金八十錢
郵送料金八錢

東京市神田區神保町十番地

東條書店

振替口座東京一七一七一番

月刊 へちまの花 第三號

主筆 堺利彦

賣文社發行
東京京橋南佐柄木町三
電話新橋二八五七
振替東京二四六二六

□一冊メツタ三錢、一年分三十錢（送料共）
□モサ〳〵する程の金額にあらず
□執筆者の爲めには買はずとも讀め
□販賣者の爲めには讀まずとも買へ

近代思想
第二巻第七號
大正元年十月一日第三種郵便物認可 毎月一回一日發行
大正三年三月廿七日印刷納本 大正三年四月一日發行
四月號
金十錢

